

ミロク

作・やのひでのり

この作品は平成14年4月、
青年座、山口あきら氏によつて上演され
たものを改稿しました。

登場人物

シダッタ^{II}ブツダ
ジーザス
アルバート
ダイバダッタ
ブラフマン
シャーリプトラ
ミロク(マイトレーヤ)

ジョン
父1
看守
富豪
弁護士
女M
子供1
5
父2
母
マリア
ファーザー
マザー
庸子

佐竹(シダッタ)
社長
布川
課長
係長
花岡
柴
岸川
小林
啓介
高井
川崎
道安

シダッタ、佐竹は同一人物が演じること。
同じくダイバダッタは小林を、アルバート
は啓介を、ジーザスは柴を演じるのが望まし
い。

第一部

1場

ある場所。

ブツダ 人々は私に会うのが容易でないと分かれば、私を見たいと渴望し、私から教えられたことを心に止めるだろう。そして育てられた善根は、人々の幸いとなり安心となる。それを信じて私は入滅した。
しかし、人類という者は愚かなものよ。互いに殺し合い、自ら滅びの道に進んだ。そして私に対する信仰も否定しはじめた。

シャーリプトラが、現れる。

シャーリプトラ ブツダよ！ 緊急事態です。

ブツダ ここには来るなといっておいたはず。

シャーリプトラ マイトレーヤが、おられます。

ブツダ マイトレーヤ。ミロクがいないと。

シャーリプトラ はい。トソツテンには誰もおりません。

ブツダ 探せ！ 徹底的に探せ！

シャーリプトラ はい。すでにやっております。しかし、どこにもおらんのです。もぬけの殻です！ 私が早く気がつけば良かったのですが。

ブツダ ミロクめ……。私を裏切ったのか。

暗転。

2場

木枯らしの吹く夜。
サイレンの音がする。

シダツタ 怖いよ。サイレンの音だ。きっと僕を迎えにきたんだ。

父1 シダツタ、あれは風の音だ。気にするな。

シダッタ 僕、捨てられるんだ。きつと母さんが僕をいらないうって言ったんだ。

父1 そんなことあるわけないじゃないか。母さんは優しい人だ。

シダッタ 優しい？ いつも僕はぶたれたよ。母さんは僕のが嫌いだったんだ。僕はもう必要ないんだ。

父1 あれを呼ぶには両親のサインが必要なんだ。大丈夫。父さんはサインなんかしてない。

シダッタ だって・・・父さんはもう市民じゃないんでしょう。

父1 そうだ。準市民だ。

シダッタ 昨日カズヤが連れて行かれた。カズヤの父さんは税金が払えなくて準市民にされた。準市民の子供は間引きの対象になるんだ。だから僕も・・・。

父1 カズヤ君が？ 本当か。

シダッタ 本当だよ。僕たち公園で遊んでたんだ。連れて行かれた。僕たちの目の前でだよ。

父1 かわいそうに・・・。

シダッタ 今度はきつと僕だよ。僕が選ばれるんだ。

父1 シダッタは明日で15だろう。15になれば準市民だ。人として扱われる。連れて行かれることなんてない。

シダッタ カズヤは先月15になった。でも連れて行かれた。きつと法律が変わったんだよ。

父1 法律は変わっていないよ。

シダッタ どうして僕たち子供ばかりがこんなひどい目にあうの。怖くて外も歩けないよ。

父1 なにもかもあの日から変わった。放射能、食料不足。それに女性の数は極端に少なくなかった。だから男は必要なくなったのさ。

シダッタ カズヤは僕にとって必要だよ。僕が一番の親友だったんだ。

父1 明日、父さんが役所にいって掛け合つてやる。これでも父さん、昔はたくさんの税金を納めたんだ。市長からも表彰されただから・・・カズヤ君は明日にでも帰ってくるよ。

シダッタ 本当？

父1 ああ。

シダッタ 絶対に。

父1 絶対だ。約束する。

シダッタ・・・よかった。

父1 もう眠りなさい。ほら、サイレンの音は聞こえない。・・・いいね。明日になればおまえも15だ。一人前だ。おびえることもない。

シダッタ はい。

父1 じゃあ、父さんは仕事に出かけるよ。日が昇るまでには帰ってくる。戸締まりをしっかりして。

父1 いったらっしゃい。

父、ドアを開けて出てゆく。

シダッタはドアにチェーンをかける。

シダッタ、寢床に入り毛布をかぶる。眠れない。

3場

ドアをノックする音。

シダッタ 誰？

再びノックをする音。

シダッタ 父さん、忘れ物？

ドアは何度もノックされる。

シダッタ 父さんから言われてるんだ。夜は扉を開けちゃいけないって。

母の声 シダッタ。

シダッタ・・・母さん？

母の声 シダッタ。

シダッタ 母さん。どうしたのこんな夜遅く。母の声 早く開けなさい。シダッタ。

シダッタ わかった母さん。ちょっと待って。

シダッタはドアのチェーンを外す。

ドアが開く。

長い棒を持った看守が立っている。

看守 ここは32番地に間違いないね。

シダッタ 母さんじゃない！

看守 君はまだ、14歳だね。

シダッタ 母さん。母さんはどこ？

看守 母さんは家にいるよ。さっきの声はテーパーだ。

シダッタ 畜生！ だましたな！

看守 さあ、表のトラックに乗るんだ。
シダッタ 帰れ！
看守 トラックに乗りなさい。素直に言うこ
とを聞くんだ。

看守、シダッタと、もみ合う。

シダッタ いやだ！

看守 おとなしくしないか。

シダッタ 父さん！ 父さん！

男は棒のような物でシダッタを殴る。
鈍い音。

シダッタ ・父さん・ ・助けて。父さん。

暗転。

トラックの音。サイレンの音。

4場

集会所。

ボタンボタンという機械の音。

暗闇の中、沢山の子供たちがうずくまっ
ている。

シダッタは倒れて眠っているが、やがて
目を覚ます。

シダッタ、頭の包帯に気がついて手を当
てる。首には10257という認識番号
がかけられている。

ジョン 抵抗したのか。

シダッタ え？

ジョン 顔が傷だらけだ。

シダッタ (顔に手を当てる)。

ジョン 馬鹿だなあ。俺はすぐに観念したね。
逆らってもどうしようもねえからな。・

おまえ、いくつだ。

シダッタ 14。でも明日には15になるん
だ。

ジョン 明日になれば助かるとも言うのか。
(笑う) おれは16だ。

シダッタ そうなの？

ジョン 年なんて関係ないのさ。15になれ
ば大丈夫だっていうのは大嘘さ。今年も食
料がとれなかった。放射能ってやつのおか
げだ。御上は食いぶちを減らすのに躍起に
なってるんだ。

シダッタ・・・。

ジョン おまえ馬鹿だなあ。そんなに顔に傷をつけて。もらい手がいなくなるぞ。

シダッタ もらい手？

ジョン そうさ。南部の金持ちがな。俺たちを買いにくるのさ。見栄えが良くなくちや買い手がつかない。わかるだろ。小さい奴らはすぐに里親がつく。育てがいがあるからな。でも俺たちみたいなの年寄り駄目だ。ほら、あそこに座っているやつを見てみる。あいつは栄養失調で耳が聞こえないとさ。おまけに目もよく見えないときてる。あいつみたくになつたら絶望的だ。

シダッタ ここは・・・。

ジョン そうだよ。噂に聞く収容所さ。この部屋だけじゃない。他には、まだまだ、俺たちみたいのがわんさかいるらしい。知ってるか？ 収容所での俺たちの命は3日だ。それまでに里親が見つからないと俺たちは処分される。

シダッタ 3日？ そんな。

ジョン ま、今更じたばたしてもしょうがない。あきらめな。お迎えがきちまつたんだから。

シダッタ・・・。

ジョン 俺たちは同期だ。一緒に捕まつたんだからな。だからもし、里親が見つからなかつたら終わりも一緒にわけて。

シダッタ・・・。

ジョン よろしく、俺はジョンって言うんだ。おまえは？

シダッタ シダッタといます。

ジョン シダッタ・・・。

部屋が明るくなり、看守が現れる。

看守 立て！ 全員立て！

皆、ぞろぞろと立つ。

看守 諸君。午後一時より面接を開始する。

持ち時間は一人一分だ。面接してください。お方は君たちを救ってください。偉いお方だ。なにぶんそそのないよう。では、それまで待機するように。

看守、去る。

皆、へたへたと座り込む。

シダッタ 何？ 面接って。
ジョン 里親だよ。この面接に受かると釈放
ってわけだ。
シダッタ 僕にはお父さんがいる。
ジョン 馬鹿。もう家族なんて関係ない。お
前の家族はお前を見捨てたんだ。だからこ
こにいるんだぞ。わかってないな。
シダッタ 父さんが・・・嘘だ。なにかの間
違いだ。
ジョン (皆に) おい！ 俺たちはラッキー
だぞ！ 100人は買ってくれるそう
だ！(シダッタの首の認識番号の札を見
て) ふうん、10257か。おれは102
70番だ。近いな。

皆、ざわつく。

シダッタ ジョン、そんなを話どこから。
ジョン 昼飯の時看守がしゃべってるのが聞
こえたんだ。間違いない。
シダッタ そうなんですか。100人も助か
るんですか。
ジョン おまえ、見た目、品がよさそうだが
らな。もしかして気に入られるかもしれな
いぞ。頭の包帯は取った方がいいな。印象
をよくしないと。
シダッタ はい。

看守の笛の音。

ジョン 早速オーデイションだ。お互い、健
闘を祈ろうぜ。
シダッタ はい。

暗転。

5場

面接室。

ピーという看守の笛の音。
5人が、看守と富豪の前に立つ。

看守 次、10256番から10260番。
富豪 本日君たちのなかから100名。私の
養子として迎え入れるつもりだ。ああ、何
度も同じ事をいうのは面倒だ。きみが言い
いたまえ。
看守 私が、ですか？

富豪 さつきから何度も聞いてるだろう。言え。

看守 は、では、私が。本日、君たちの中から100名、養子として迎えられる。それで・・・私は、いや、慈善事業を、いや・・・。

富豪 何を言つとるのかね。

看守 失礼しました！

富豪 もういいい！ さがりたまえ。

看守 は。

富豪 諸君。わかつていると思うが、私は慈善事業をしているわけではない。私のところにきたら、家族として、いや社員として厳しく働いてもらう。いいね。もし、やる気がないならここで辞退してもらってかまわない。辞退者はいまずぐ退出したまえ。

間。

富豪 退出者なしか。いいだろう。よし、全員裸になれ。・・・どうした。裸になるんだ。早くしろ。

皆、おそるおそる裸になる。

富豪は体のあちこちを触る。

富豪 ん。決めた。これにする。

看守 質疑応答の方は。

富豪 面倒だ。これでいい。

看守 しかし手続きというものが・・・。

富豪 ・・・・。

看守 いや、失礼しました。では発表する。

今から呼ばれる者は合格だ。ここに残りなさい。10256番、10258番。10259番、10260番、以上。呼ばれたものはあちらの部屋にすぐ移動すること。移動！

・・・ああ、服は、手に持って行きなさい。

シダッタ以外の者の子供は去る。

富豪 後、何人だ。

看守 76名ほどおりますが。

富豪 76？ まだまだだな。そうだ、最初から裸で面接してくれ。それからいちいち説明はせん。体だけ見れば十分だ。

看守 しかし、規則では・・・いや失礼しました。

富豪 私は疲れた。飯にするぞ。

看守 は！ では、休憩にします。休憩！

では、こちらにどうぞ。

看守、富豪が去る。

シダッタ一人で呆然とする。

6場

夜。集会室。何人かの子供たちが毛布にくるまって寝ている。

シダッタ (ささやく) ジョン。もう寝ちゃった？ ジョン。

ジョン ああ。起きてるよ。眠れないのか。

シダッタ はい。

ジョン 心配するな。こんなとき眠れる方がおかしいんだ。

シダッタ ……。

ジョン しかし、おまえはいけると思ったけどな。ま、気にするな。明日もチャンスはある。それにしても人を裸にしやがってなんだと思ってるんだ。あのホモやろう。

シダッタ 僕たち後2日ですな。

ジョン これやるよ。

シダッタ チョコレート…。

ジョン 食堂からくすねてきた。

シダッタ いつの間に…。

ジョン …シダッタ、食わないのか。お前、夕飯食わなかっただろ。駄目だ。空腹だともっと眠れないぞ。眠らないと顔色が悪くなる。明日のオーディションに影響がするぞ。さ、これ食べてさっさと寝ろ。

シダッタ うん。ありがと。

シダッタ、チョコレートを食べる。

シダッタ 聞いていいですか。

ジョン なんだ。

シダッタ どうしてそんなに平気でいられるんですか。僕には理解できない。

ジョン 平気。平気なもんか。俺だって怖いさ。空元気だ。

シダッタ そうなんですか。

ジョン 死んだ親父が言ってた。男は死ぬとわかっていても最後まで闘わなければ駄目だ。決してあきらめるな。ってな。

シダッタ お父さん、亡くなったの？

ジョン ああ、でも母親がすぐに金持ちを見てつけて再婚した。だから今は、親父はいる

といえはいる。

シダツタ 僕たち鬪えるんですか。

ジョン お前、神を信じるか？

シダツタ 神？ 神様ですか。神様はもうず

いぶん前に死んだと、父がいつてました。

ジョン 俺は信じてるぞ。神はいる。きつと
だ。

シダツタ もしかしてミロクのことですか。

ジョン ミロク？ あれは偽物だ。俺たちが

おとなしくしているように政府が作り上げ
た神だ。ミロクなんてくそくらえだ。俺は
最後まで鬪ってやる。

ジョン 鬪う？ どうやって。武器の一つも
ないじゃないですか。

ジョン それは自分で考えるんだ。俺は俺の
やり方で鬪う。まあ、みてるよ。

7場

朝。

集會室。看守が入ってくる。

看守 立て！ 全員立て！

皆、立つ。

看守 今日は面接の予定はない。諸君は明日
まで待機すること。以上！

あたりがざわめく。

声を上げて泣く者もいる。

看守、紙をめくりながら。

看守 静かにしろ！ 静かにするんだ！

10257番、10257番！ いるか？

シダツタ はい。

看守 こっちにこい。

シダツタ、歩み寄る。

ひとりの子供が大声を上げて「助け
て！」と看守にすがる。

看守 うるさい！ 静かにしないか！（子供
を蹴る。子供は転がる。）本日面接がない
のは我々の責任ではない。収容所に収監さ
れた者は3日間の猶予期間を経て処分され
る。つまり、面接を通して里親が見つから
ない場合・・・諸君たちの場合。明日の面
接が最後の面接になる。これは環境衛生法

第25条によるものだ。
・・・10257番。ついてこい！

シダッタと看守、去る。
子供たちがいつせいに泣く。

8場

面接室。

暗い小さな部屋。

中央をガラスで二つに仕切られている。

看守 面会だ。入れ。

シダッタの父さんがいる。

シダッタ 父さん！

父1 シダッタ！

シダッタ 父さん、やっぱり来てくれたんだ

ね。早く僕を出して。

父1 ・・・。

シダッタ 父さん。寒いんだ。もう我慢でき

ないよ。

父1 すまんシダッタ。なんとかしようとし

たんだ。・・・すまん。

シダッタ 父さん。

父1 すまん・・・。

シダッタ ・・・父さん・・・明日僕は処分

される。助けて、助けて。(泣く)

父1 わかっている。わかっているさ。父さん、

明日中に必ず金をつくる。そして永久市民

権を得る。永久市民の子供は施設に送られ

ることは絶対にならないからね。

シダッタ ・・・。

父1 シダッタ、もう泣くな。必ず助けてや

る。明日ここから出してやる。

シダッタ ・・・。

父1 シダッタ・・・父さんを信じて待って

いてくれ。

9場

夜。集会室。

ジョン 畜生。昨日は100人もシヤバに出

られたって言うのによ。ついてねえなあ。

まさかオーデイションすらないとはな。

・・・さっきおまえ面会室に連れて行かれ

たな。誰と会ったんだ。

シダッタ 父です。

ジョン 親父か。・・・それで何だつて。

シダッタ 永久市民権を明日までに取ってくるって。それでここから僕を出してくれるって。

ジョン そうか。それはよかった。本当によかった。

シダッタ でも、永久市民権なんてそう簡単にとれるものなんでしょうか。

ジョン ・・・さあね。

シダッタ 永久市民権を取るとその家族は死ぬまで保証される。シエルターが用意され、放射能汚染のない、地下都市に住むことができる。でも、そんなお金、うちにはないはずだ。父さんが今の仕事を一生続けたとしても。・・・とてもじゃない、無理だ。でも父さんは約束してくれた。

ジョン ・・・。

シダッタ もしかして、僕を慰めてくれただけなのかな。父さんは、僕が怖くて眠れないのを分かかって嘘をついてくれたのか。

ジョン シダッタ。もういい。

シダッタ 嘘なんだ。永久市民権なんて嘘だつたんだ。別れの挨拶にきつと。

ジョン 黙れ！ もう寝ろ。

シダッタ ・・・。

10場

朝。

集会室。

看守 立て！ 立つんだ！

皆、毛布にくるまつたまま、立たない。

看守 諸君、本日午後1時より面接を開始する。わかっているとあなたがクライアントは君たちを救ってくださる偉いお方なのだからくれぐれもそそのないように。

11場

面接室。

女、太っていて醜い。
強い香水のおいがする。

女M いやあね。この子。皮膚病ね。私にうつさないでよ。あっちいつて！

看守 次、10257番。一步前にでなさい。

女M うーん。ルックスはまあまあね。でも、背丈がちよつとほしいわね。私、大きな子がほしいのよ。

看守 次、10257番。

シダッタの一步前が出る。

女M あら、この顔の傷、どうしたの。けんかでもしたのかしら。いやーね。でもいいわ。男の子は多少はらんちゃんところもないとね。

シダッタ . . .

女M あなた、楽器弾ける？

シダッタ . . .

女M ピアノなんかできるとうれしんだけど。どう？ 弾ける？

シダッタ . . .

看守 10257番。答えなさい！

シダッタ ギターなら少々。小さい頃、父から教えてもらってましたから。

女M ギター?! 下品ね。だめよ。ピアノじゃないと. . . 残念ね. . . 次、お願い。シダッタ . . .

看守 次。10275番。

女M いい体してるわ。タイプよ。でも、ルックスがいまいちね。 . . . ちよつと。

看守 は。

女M (看守に耳打ちをする) いいわ。

看守 は。では. . . この中では合格者なし! 全員退出しなさい。

子供たち、皆、ざわめく。

突然、子供達が叫ぶ。

子供1 冗談じゃねえ! 俺たちをなんだと思ってるんだ。

子供2 そうだ! 売り物じゃないんだ!

看守 静かに! すぐに退出しなさい!

子供1 馬鹿野郎! もう俺たちには後がないんだ。

子供2 どうして俺たちなんだ。俺たちはなんにも悪いことしてないじゃないか!

看守 静かに! 痛い目にあいたいのか。

子供3 痛い目? 会わせてもらおうじゃないか。どうせおれたちや殺されるんだ。

子供達、「そうだそうだ！」などとなる。

子供4 おまえ、いったい何者だ。何の権利があつて俺たちに命令する。

子供5 いつてみるよ！ おまえは市民なんだろ。おれの家は貧しかった。それだけで準市民にされたんだ。それだけだ。どうして殺されなきゃならねえんだ！

看守 黙れ！

子供1 みんな！ 犬死にしたいよな！

全員 そうだそうだ。

子供1 やつちまえ！

子供、全員暴れ始める。

看守と、もみ合っている。

非常ベルがなる。

12場

集会室。

ジョン シダッタ。やるじゃねえか。

シダッタ ジョン。

ジョン 聞いたぞ。おまえらのグループ。看守にたてついたらだつてな。

シダッタ うん。

ジョン おかげでオーディション。俺のところまで順番が回ってこなかったよ。(笑う)

シダッタ ごめん・・・。

ジョン なに言ってるんだ。おまえは立派に闘った。それでいい。

シダッタ 闘った？

ジョン そうだ。闘った。

シダッタ 僕は闘ってなんかいない。僕は、僕は・・・何の役にも立たなかった。

ジョン おまえたちが暴れたことはすくなくとも何かの役に立つ。きつとだ。いつか、きつとだ・・・。

シダッタ ジョン。僕たちはあと数時間後に処分されるんだよ。いつか役に立つんじゃないか。意味ないじゃないか。

ジョン ・・・・。

シダッタ ジョンはどうやって闘うのさ。確か、僕にそういったよね。どうするのさ。

ジョン ・・・・。

あたりがざわめく。

看守が入ってくる。

看守 本日、午後5時より政府セバス教会より牧師様がおいでになる。君たちを慰めにいらっしやるのだ。牧師様は永久市民の中でも最も偉いお方の一人だ。くれぐれもそそのまないように。

・・・(紙をめくりながら) 10257番、こちらにきなさい。

シダッタ はい。

看守 ついてこい。

皆がシダッタを見つめる。

シダッタと看守、去る。

13場

面接室。

ドアが開く。

ガラスで仕切られた暗い部屋だ。

シダッタ 父さん？

弁護士 シダッタ君だね。

シダッタ ……

弁護士 こんにちは。

シダッタ ……誰？

弁護士 私は君のお父さんの代理人だ。本日君のお父さんは永久市民として承認された。従って、君も市民として迎えることになった。シダッタ君。今、すぐに君は釈放される。

シダッタ 父さん、父さんはどこにいるの。

弁護士 君の父さんは事情があつてここには来られない。

シダッタ どうして？ どうしてここに来られないの？

弁護士 それは車の中で話そう。

暗闇の中に子供達。両手を綱でつながれて一列になつて歩く。

シダッタの独白 長い廊下を歩き僕は釈放された。途中、焼却炉に向かう子供たちの列とすれ違った。みんな僕を恨めしそうな目で見ていた。ふと、気がつくと列の中にジョンがいた。僕はあわてて目を伏せようとした。しかし、間に合わなかった。僕はジョンに対してどんな表情をしていいか分からなかった。ジョンは僕にほほえみかけた。

・ ・ ・
どうしてだ。こんなとき笑顔を見せる余裕があるのだろうか。わからなかった。
・ ・ ・
いいんだ。僕ひとりの力ではジョンを助けることなんてできないんだ。仕方ないんだ。
・ ・ ・
ジョンは僕に最後まで闘えと聞いた。彼だつてやっぱり闘うことなんてできなかったじゃないか。

子供達の列、去る。

14場

永久市民の部屋。
明るい。

シダッタの独白 悪夢のような日から一ヶ月が過ぎた。また元のように僕と父との二人暮らしが始まった。でも以前とは違う。僕たちは正式な市民なんだ。もうサイレンの音なんかにびくびくしなくてもいい。住む場所も環境もまったく変わった。僕たちには地下都市にある永久市民専用のシエルトーが与えられた。人口太陽が照りつける高層マンションだ。あんなスラム街の掘っ建て小屋とはおさらばだ。父さんが永久市民になつてからすべてが変わつたんだ。僕たちは幸せだ。本当に幸せだ。

シダッタ、父1の影に話しかける。

シダッタ 父さん、今日はいい天気だよ。

父1 そうか。いい天気か。

シダッタ 雲一つない。いい天気だ。すごいね。人間って空も太陽も作り出せるんだね。

父さん、今日はなにが食べたい？

父1 うん、おまえが好きな物でいいよ。

シダッタ 父さんは永久市民なんだよ。何でも好きな物を食べてもいいんだ。

父1 いいよ。なんでも。

シダッタ でも。

父1 そんなに贅沢したくないんだ。

シダッタ そう。。。

シダッタ そうだ。旅行は？ 旅行に行こうよ。

父1 旅行か。いいな。

シダッタ 僕たちはどこだつて行けるんだよ。

父1 昔はそんな夢を見たことがあったな。でも、それがいつでも出来るとなるとな。シダツタ 温泉ならいいでしょう。お風呂につかると気持ちいいよ。

父1 ああ、そうだね。温泉がいいかな。シダツタ そうだよ。楽しまないとそんだよ。僕たちは永久市民なんだ。前みたいな生活に戻ることはないんだから。父さん、もつともつと楽しもうよ。

父1 ああ。
シダツタ そうだ。さつき、母さんから連絡があつてね。家に遊びにきてもいいかって。母さん、もう一度やりなおしたいって言ってるんだ。どうする。

父1 父さんは、かまわないよ。
シダツタ 僕は許せないな。だつて、母さん、僕たちを捨てたんだよ。今一緒に暮らしてる男の人、もうすぐ市民権がなくなるんだつて。都合がよすぎるよ。

父1 母さんを助けてあげよう。過去のこと
は過去のことだ。
シダツタ 僕は収容所で殺されかけたのに。
父1 おまえ母さん、嫌いか。
シダツタ ……大嫌いだ。

父1 シダツタ。母さんが出ていったのはね。そもそも父さんが税金が納められなかったのが原因なんだ。母さんのせいじゃない。
シダツタ でも。
父1 シダツタ。大人になりなさい。そうやってみんな大人になるんだ。

シダツタ ……。
父1 シダツタ、新聞読んでくれ。いつものようにゆっくりとね。
シダツタ はい。

シダツタの独白 僕は父にこうやって話しかけている。毎日が楽しい。あのころと比べると夢のようだ。

シダツタ、両手に父1を抱え、テーブルの上に置く。

愛おしく両手で父1をなでながら。

シダツタの独白 父は体売った。そう、臓器を売ったんだ。手も足も、心臓まで僕のために使ってくれた。

父に残されたのは首から上の部分だけだ。いや、正確には違う。目は売ってしまった。臓器の中で目が一番高価なんだ。永久市民になるためには最後にどうしても目を売らないといけなかった……。

僕たちは幸せだ。本当に幸せだ

シダッタは新聞をめくる。

シダッタ 父さん、驚きだよ。永久市民の子供が間違つて処分されたことがわかつたんだって。こわいね。

父1 役所のやることだ、そんなもんだ。

シダッタ へえ、おもしろいよ。死んだのは政府の教会の牧師の息子だって。なんでもこの街で一番偉い牧師さんなんだって。ふうん、被害者の名前はジョンか。ジョン？ ジョン……。

父1 なんだ？ 知ってるのか。

シダッタ ……まさか。知らないよジョンなんて。

二人笑う。

遠くで聞こえるサイレンの音。

風の音。

シダッタが暗闇を歩く。いつの間にか、インド霊鷲山を歩いている。

15場

「西暦紀元前383年 インド・霊鷲山」

大勢の僧侶たちがブッダにひざまずく。中央に老いた日のシダッタ、ブッダが座っている。

ブッダ（シダッタ） マイトレーヤ。ミロクよ！ 今、話したような、こういう世界が理解できるか？

これは、これからちょうど3000年後に実際に起こる出来事、いや、起きた出来事なのだ。この意味がわかるか。

お前には智慧がない。智慧とはなにかわかるか？

仏の智慧は、奥深く簡単には計り知れないものなのだ。そして、見極めがたく、理解は困難なのだ。たとえ私の一番弟子、シャリプトラであつたとしても決してわからないであらう。

お前はこれからトソツテンへ行け。そして修行を続けるのだ。そのうち、仏となり、

悟りを得られるだろう。

．．．
そうだマイトレイヤ。お前はこれから56億7千万年後、私の後継者となり、この世を救うのだ！

皆がざわつく。

ブツダ 私はこれから入滅する。

さらに皆がざわつく。

ブツダ ミロクよ。早く行け！ トソツテンへ。そしてそのときが来るのを待つのだ！

ブツダが目を閉じて動かなくなる。
皆が歓声をあげる。

第二部

16場

「西暦2005年 東京」

輸入代行会社。

電話に向かう営業マンたち、花岡、岸川、柴、小林

事務の女性が二人、課長と係長。

アルバイト風の男二人、佐竹と啓介。

茶髪のいまだきの女、高井。

花岡 はい、どうも、失礼いたします。．．
．あ、もしもし、輸入代行のサムシングともうします。先日、いただいた資料案内の件で．．

岸川 ええ、それはごもつともで．．．そうですね。できたらですね。本日5時までに振り込んでいただいたら．．．ええ、みずほ・東町支店．．．ええ、西東の東町ですね。

口座番号が・・・。

柴 (腰に手を当てて調子良さげに) もう、今しかないですよ。ええ、来週から値段あがつちゃいますからね。・・・(あまえるように) やりましようよ。一緒にやりましよう。ね。向田さん。・・・よし。決まった。ありがとうございます！

小林 そうですか、いらつしゃいませんか。・・・でしたらまた都合のいい時間に、かけなおします。・・・ええ。どうも失礼いたしました。

全員の電話の会話がとぎれる。

花岡 とれた？

柴 とくとくバック30万円。とれました。

花岡 おう！

岸川 すばらしいね。

営業マンたち、ぱらぱらと拍手をする。柴は誇らしげに、営業成績表の自分のグラフに棒を加える。

品のないスーツを着た男、社長が登場。後ろに会社二番手の布川もいる。

社長 もどりましたよ。

花岡 お帰りなさい。

全員、それぞれと「お疲れさまです」とか、「お帰りなさい」という。
社長、営業成績のグラフを見る。

社長 おお、柴、やったな。(握手を求めらる)

柴 ありがとうございます。

社長 柴、おまえ、この成績だと来月は部長にしてやる。がんがん行ってくれよ。

柴 部長ですか、いいですね。

社長、中央一番奥の自分の席に座る。
布川も社長の近くの自分の席に座り、なにやら小さな声でしゃべりながらダブルのスーツを脱ぐ。

係長(女)が社長にお茶を入れようとする。

社長 高井君！ すまんね。お茶入れてくれない。コーヒーでいいよ。

係長 今、私が入れようしてるのに・・・。

社長 係長。私はね。高井君に入れて欲しいんだよ。いやあ、高井君、君の入れるお茶は最高だよ。疲れがすばつととれる。

係長 じゃあ、高井さんをお願いしようかな。
高井 はい。・・・あの、社長のカップは・・・

係長 ああ、決まってる。適当でいいよ。その辺にあるの。

高井 適当？ その辺って？

社長 小林！ 小林！

小林 はい。

社長 小林、声が出てないんだよ。声がかかるか。

小林 はい。

社長 だから声が出てないって言ってるじゃないか！・・・課長、もどりましたよ。

課長（女） しゃべりかけないでください。

社長 課長、調べてくれた？ あれ。旧暦の表、鎌倉時代よ、日蓮上人の誕生日。

課長 ちよつと計算中です。あと5分ですから。

社長・・・小林！

社長、小林のそばに歩み寄る。

社長 何だよこれは。（営業成績グラフをみながら、小林のグラフが全く伸びてないのを指して）声が出てないんだよ。花岡をみる。柴をみる。岸川もみんな声でてるじゃないか。

皆、いきなり電話の声が声高になる。

社長（時計をみながら）営業部！ 5時から営業ミーティングだ。わかったか。5時からだぞ！

社長、佐竹の方を振り向き。

社長 おお、いい男！ 元気でやってるか？

佐竹 はい。元気です！

社長 いい男だねえ。アルバイトにしとくのもつたいない。社員にならんか。え。給料今の倍になるぞ。

佐竹 いえいえまだ僕なんて。

社長 ほんと、いい男だね。

佐竹 ありがとうございます。（はつらつと）社長も元気ですよ。

社長 そうか、俺はな、パナクルっていつて海外のすごいサプリメント飲んでるか

らな。朝も、昼も夜もびんびんよもう（お釜っぽく）。ね。係長！

係長・・・

社長 ね。係長。夜もびんびんよねえ。

係長 あなた！ いや、社長！ 公私混同や

めてください。今は私、係長ですから。

社長 まったく冷たいんだから・・・啓介！

啓介 う。

社長 啓介。返事は。

啓介 う、あ、はい。

社長 あ、はい？ おまえ、佐竹の返事を見

習え。いっつも・う、とか・あ、はいと

か、うじうじうじうじして。

啓介 （小さく）はい。

社長 今月分の売り上げ、すぐに出しておい

て。ミーティングに使うから。5時ね。

啓介 5時ですか・・・5時は・・・

社長 おまえ、データベースできてるんだろ。

啓介 ええ、でも・・・

社長 でも何だよ。

啓介 あの、というか、朝からコンピュータ

ーがですね。バグってる訳じゃないですけ

ど。ランの調子がですね・・・

社長 なんなんだよ。私に分かるように説明

してくれ。おまえ誰だ。

啓介 え？

社長 なんて雇われてるのかって聞いているん

だよ。

啓介 えーその・・・

社長 えー。じゃないよあ。おまえコンピュー

ターのエンジニアなんだぞ。なんとかし

ろ。

啓介 はい。

社長 どうなの？ 5時までに出せるの、出

せないの。

啓介 データは入ってますから・・・あー。

だから・・・

社長 5時ね。（奥の自分の席の方へ）

ファックスが流れ出る。

岸川 来た、振り込み、振り込み。

岸川、小躍りしながら、ファックスの内容を確認する。

岸川・・・

高井 社長、ミルクはお入れしますか。

社長 ミルク。いれて。できれば君自身のミ

ルクが欲しいな。あは（笑う）。

高井 は？
課長 高井さん聞かなくていいからね。よけいなことは。
高井 はい。

岸川、営業部の連中と今、来たばかりのファックスを回し読みしている。

花岡 またか。困ったね。

高井、社長にコーヒーを持っていく。

社長 いいねえ。うまい。高井君の入れてくれるコーヒーはいつもうまい。係長のは比べもんじゃない。

係長 高井さん、社長にコーヒー入れるの初めてよね。

高井 はい。

社長 何言ってるんですか。係長の見えないところでいつも入れてもらってるんですよ。ねえ。高井君。

高井 え。

課長 高井さん。社長ふざけてるだけだからかまわないで。

高井 はい。

課長 佐竹ちゃん、交通費まだよね。

佐竹 はい。まだです。

課長 じゃあ、今週の分ね。渡しとく。(封筒を差し出す)

佐竹 ありがとうございます。

佐竹、交通費の封筒をつれしそうにあげる。

花岡はファックスを社長のところに持っていくとする。

布川 花岡君、何。

花岡 ええ、これを社長に見てもらおうと。

布川 そういうのは先に見せて。(不機嫌に)。

花岡 あ、すみません。

布川 . . .

社長、歩きながらコーヒーを飲み、

社長 啓介、できそうなの？

啓介 え、. . . はい。

社長 啓介よー。

啓介 今月分ですよね。

社長 だからそういつたろ。

啓介 終わりました。
社長 終わりましたって、何ももらってないよ。私は。

啓介 今、社長にメールしましたけど。
社長 メール。メールって・・・。
啓介 社長のパソコンにデータ入ってます。開けてください。

社長 お前、何にもわかってない。
啓介 う。あああ。

社長 私は社長だよ。なんで私がパソコンあけないといけないんだよ。

啓介 あの・・・せつかくランを引いたんですから・・・。

社長 あなたね。状況把握しなさいよ。私はね。アナログ人間なんですよ。わかる。君みたいなデジタル人間じゃないんですよ。
課長 啓ちゃん。うちは最近までパソコン飾りだったから。いきなりメールはね。

啓介 データーのプリントアウトってことですか。

社長 データー？ プリントアウト？

佐竹 ああ、僕がやります。今、手があきました。今月分の売り上げのプリントですね。
啓介 あ、ごめん、僕、このコードすぐに直さないといけないから。

佐竹 うん。いいよ。やるやる。

社長 お、いい男。頼むよ・・・（佐竹の耳元で）後でメールの使い方教えてよ。ほら、啓介はエンジニアだからさ。意志の疎通がな。

布川が社長に近づく。

布川 社長、ちよつといいですか。

社長 なに。また真剣なこと。

布川 はい。

社長 いますぐ？ 今日が弁護士の先生となんだかんだと疲れてるんですよ。君も疲れたでしょう。止めようよ、真剣な話は。

布川 はい。それは。

社長 5時のミーティングまで待てない？

布川 はい。今の方がいいと思います。

社長 なによ。いつたい。

社長と布川、奥の席に座ってファックスを見る。

営業マンたちは、再びテレアポをしている。

柴は、腰に手を当てて、笑いながら余裕のトーク。

柴 そうですよ。3ヶ月で、月額粗利100万円、サイドビジネスでこれは大きいでしょう。……ただいまうちの会員のみなさん現在3152名の粗利の平均がですね。(ぱらぱらと紙をめくるふりをする)……111万6千円。……ええ、そうです。……はい。よくご存じで。

花岡は、丁寧に落ち着いて。クレーム処理をしているように話す。

花岡 牧野さん、いや、こんなこといままでもなかつたじゃないですか。……いえ、違います。いままで私が嘘をいったことありませんか。……信じてくださいよ。たたいまですね。商品の価格改正がありましてね。ええ、それからほら、イラク戦争、あれからチエックが厳しくなりましてね。それになかなか商品が届かないんですよ。……はい、もう少し、もう少しお待ちください。はい。はい。……。

岸川は、なじみの客と取引の話をしている。

岸川 いいですよあれ。ぶるぶる震える人形行きつけの店に置いて置きましたらね。女の子に人気人気。すぐになくなりました。……ええ。それでですね、社長。サンプルをあと3つほど送っていただければ、これは店の女の子の意見なんですけどね。もうちょっと大きくて振動がある方がいいつて。……はい、はい。そのときは、キヤサリン岸川をご指名ください。……やーだー。社長さんつたら。……はい。……わかつてるわよ。それはこんど二人っきりの時にゆつくりと……はあい……。

小林は、汗をかき、それをハンカチで拭きながら必死にアポイントを取ろうとしている。が、うまくいかず、謝ってばかりいる。

小林 そうですか。えーとですね。今、ご入会いただけるとですね。7万8千円ほどお安くなっておりますが……ああそうですか。ご主人一人では決めかねますか。わか

りました。では、奥様とよくご相談して
から。・・・では、今度の機会に。はい、
どうもありがとうございます。失礼します。

社長の顔が険しくなっている。

社長 井田か、また。あのダイバダッタめ！
布川 井田に間違いないですね。・・・どう
します。

社長 あいつ案外しつこいな・・・とりあえ
ず、これコピーね。証拠品だから丁寧だね。
おい、高井君こっち来て。

高井 はい。

布川 社長、これは私が。

社長 そうだよな。

高井 はい。なんででしょう。

社長 ごめん、高井君。いいよ。

高井 はい（くるりと回って元に戻る）。

布川がファックスのコピーをとる。

社長 いい男！ ちよつとこい。佐竹！

佐竹 はい。

布川 佐竹君は・・・。

社長 大丈夫、佐竹は井田知ってるから。前
の嫌がらせのファックスも見てるし。

布川 佐竹君、ちよつと来て。

佐竹 はい。今、売り上げのプリントアウト
終わりますけど。

社長 こっち優先、ちよつと見てこれ。

社長、佐竹にファックスのコピーを見せ
る。

佐竹 ははあ、例のあれですか。井田さん、
も相変わらずですね。

社長 いつとくけど、これは仕事だからね。

興味本位とか遊びで見てもらっちゃ困るよ。

佐竹 はい。当然。・・・。

布川（もう一枚の紙を引き出しから出す）
それでね。これさ、前に来たやつなんだけ
ど、同じ筆跡に思えない。

社長 探して。字の特徴。

佐竹・・・これって脅迫してますね。

布川 君は内容、読むんじゃない。筆跡だけ
見ればいいんだよ。

佐竹 はい・・・。

課長 また、井田ですか。

社長 まいったよ。こいつどうかしてるよ。
ほんと首にしてよかった。

岸川 (自分の席に着いたまま) まったく井田のやろう! りっぱな恐喝じゃないか。殴ってやろうか!

社長 花岡、緊急会議ね。電話もう止めちゃって。

花岡 え、いいんですか。

社長 いいんですよ。会社の存亡にかかわることなんですよ。

花岡 はい。じゃあ、みんな会議室に。

小林はまだ、電話を続けている。

花岡 小林君、その電話で切り上げてね。

小林 (ちらとみながらうなづく)

佐竹 このひらがな「の」の字。ですね。あと、手偏ですね。これはね具合が、同じです。あとは、日ですね。丸まったこの部分が同じです。

布川 ああ、そうだね。(えんぴつで丸をつける)

社長 さすが、佐竹大先生。作家の卵だけのことはある。いい男だ。

布川 これだけ特徴があれば同一人物でしょうね。

社長 素人目でみてもそうだからな。井田の奴、こういうところが抜けてるんだよな。

馬鹿な奴、今の時代、パソコン使えよ、パソコン・・・じゃあみんな、会議室ね。小林! はやくしろ。

小林 (でんわしながら頷く)

社長 課長と係長も来て。

課長 計算もう少して終わるんですけど。

社長 社長の私が言ってるんですよ。後回しにしないさい。

課長 はい。(不満げに)

布川 高井君、電話かかってきたら。コールバックね。

高井 はい。

布川 佐竹君もね。

佐竹 はい。

布川 コールバックね。全員、会議室だから頼むね。

佐竹 回さなくて。

布川 回さなくていい。全部コールバック。任せたよ。

佐竹 はい。

全員、いそいそと、会議室へ。

佐竹、啓介、高井が取り残される。

高井 佐竹さん、何かあったんですか。
佐竹 ああ、前にね。そこに座ってた人。うちの営業マン。井田さんっていうんだけど。今は、いないんだけどね。

高井 なんかしただんですか。

佐竹 いやがらせしてるみたいよ。うちの会社。

高井 いやがらせ。

佐竹 そう、社長がね。首にしたのよ。先月。

高井 首ですか？ なにか失敗したんですか？

佐竹 いやいや。単に営業成績が悪かっただけなんだけどね。そしたら、報復つていかね。うちの顧客名簿コピーしてもつていつちやつてね。3000人分よ。ファック。スで怪文書流したりして、お客さんにいるんな噂を吹き込んでるらしいのよ。

啓介 井田さん、また、ファックしてきたの？

佐竹 そうなのよ。今度はすごいよ。単なる嫌がらせじゃないよ。

啓介 あきないねえ・・・。

佐竹 うちの会社の秘密をばらされたくなかつたら月末までに300万円振り込めだつて。

啓介 300万円？ 今度はお金になったの。そりやまたひどいね。

佐竹 そうだね。恐喝だね。

啓介 秘密ってなんだろ。不当解雇とか？

佐竹 いや、そうじゃないみたい。うちの業務がね。薬事法違反だつてさ。それをばらされたくなかつたら300万円払えとかなんとか・・・さつきそんな内容が書いてあったよ。

高井 違反してるんですか。うちの会社。

佐竹 いや、違反はしてないと思うよ。たとえば、少し前に話題になった、バイアグラって薬あるでしょ。あれ、売っちゃだめなのね。輸入して国内で売ると薬事法違反なのよ。

高井 うちの会社売ってるじゃないですか、バイアグラ。

佐竹 いや、売ってはなないんだよ。輸入代行。あくまで個人輸入の手助けだから。個人輸入だとオツケ！。

高井 よくわからないんですけど。

佐竹 バイアグラはお医者さんじゃないと処方できないのね。でもね、お客さんがバイアグラ欲しいっていつて、個人で輸入する分にはいいのよ。でも、個人でやるつてい

つてもインターネットで直接海外に申し込むと、英語がわからないと難しかったり、商品が届かないとかトラブルがあるでしょう。それで、うちの会社はそれの代行をしているのよ。

高井 そうなんです。でも、そんなにバイアグラって売れてるんですか。

佐竹 駄目だね。ブームが去って下火だね。だから社長も不機嫌不機嫌。

啓介 ほかにもあるよ。エフェドリンとかGH Bとか。

高井 なんです。それ。

啓介 え？ うーん。

佐竹 麻薬みたいなもんね。

高井 それって・・・。

佐竹 いいのいいの。日本の法律では禁止されてないんだから。GH Bとかはアメリカ

だと持つてるだけで逮捕されるけどね。高井 それってやばくないんですか。私、麻薬とか売ってる会社でバイトしてるんですか？

啓介 うーん。そうじゃなくて。佐竹 社長もね。法律すれすれの仕事。そういうのが好きみたいよ。本人曰く、その方が楽しいんだって。それに儲かるって。

高井 儲かるってそんな問題なんですか。

佐竹 ほら、さっき社長たち外出してたですよ。あれって弁護士さんのところにいったのよ。弁護士がいるから大丈夫じゃない。なにかで訴えられても。

高井 本当ですか・・・。

佐竹 大丈夫だよ。啓ちゃん。

啓介 ええ。大丈夫です。直接販売してる訳じゃないし、ここに薬の在庫があつたら別ですけど・・・。

高井 佐竹さんはここでどのくらいバイトしてるんですか。

佐竹 そうだねー。1年ぐらい。

啓介 僕ちゃんは、10ヶ月。(皆無視)

高井 コピーライターとして？

佐竹 そう。実際は、雑用7割だけ。

啓介 僕ちゃんはエンジニア。(皆無視)

高井 コピーライターって、どういうことしてるんですか。何か書いてるんですか？

佐竹 私は、この薬でダイエットに成功。3ヶ月で10キロ痩せました。世界が見違えるようになりました。なんてね。体験談が主かなあ。ほら、雑誌に広告載せるでしょ。

高井 あれって佐竹さんが書いてるんですか。佐竹 そうよ。雑誌の体験談なんて信用でき

ないね。みんな僕みたいな売れない作家の卵が書いてる。

高井 げー。シヨック。結構真剣に読んでた。バストがアツプしたとか。

啓介 アツプバレスト。うちも扱ってるよ。

高井 なんすかそれ。

佐竹 おっぱいが大きくなる薬。アメリカで流行ってるらしいよ。3カップアツプだつて。

高井 3カップって！ 15センチってことですか。ええ、欲しいなあ。アツププレストか。

佐竹 今、その体験談書いてるとこ。兵庫県の19歳の女の子、半年でバストが3カップもアツプしましたって。・・・待てよ、27歳くらいの方が本当っばいかなあ。

高井 嘘なんじゃん。作ってんじゃん。

佐竹 (笑う)

啓介 高井・ちゃん・アメリカのアツプバレストの公式ホームページ見る？ ちゃんときくようになったって体験談書いてあるよ。

高井 でも、佐竹さんみたいな人が書いてるんでしょ。

佐竹 うーん。写真があるからなあ。本当かもしれない。

啓介 写真は簡単に合成できますからねえ。

高井 あたし、本当にバストが大きくなるんだつたらほしいなあ。嘘でもいいから試してみたいなあ。3カップか・・・。

電話が鳴る。

高井がとる。

高井 はい、輸入代行のサムシングです。・・・はい。ただいま担当者は席を外しております。・・・はい。・・・。

高井、メモをとりながら電話の応答。

佐竹 啓ちゃん、そうだ、借りてた漫画。ねこぢる、返さないよ。(鞆をあけて)・・・はい、サンキュー！

啓介 この旦那があるけど見る？

佐竹 旦那も漫画家なの？

啓介 そう、夫婦で漫画家。でもねこぢるは自殺しちゃったけどね。

佐竹 そうなの？

啓介 そう、首つり自殺。

佐竹 首つり？ あんなにかわいい絵をかい

てるのに。自殺か。知らなかった。

小林、戻ってくる。

高井 小林さん、南さんという方からお電話がありました。

小林 そう、ありがとう。・・・（椅子に座る）。

高井 あれ、小林さん、会議いいんですか。

佐竹（ささやく）高井ちゃん。（手を横に振る）

高井 あ・・・はい。

小林 僕は、会議には関係ないみたいですよ。来月には首ですね。井田さんと同じだ。

一同、沈黙。

17場

ある場所。

明るい。とにかく明るい。

ダイバダッタ 神は老獺である。君が言った言葉だ。

アルバート 神は老獺、確かに。しかし、悪意はないと言ったんだ。ここでいう神とはお前たちが求めているミロクとかいうものとは違う。私の信仰する神はこの自然の中にあるのだ。

ダイバダッタ 誰かが来る。

アルバート・・・。

シダッタが現れる。

シダッタ ここはどこ。

ダイバダッタ 待っていましたよ、シダッタ。

シダッタ どうして僕の名前を？

ダイバダッタ・・・。

シダッタ 僕はどうして。

アルバート ここはな。

ダイバダッタ よけいなことはいわんでくれ。

さあ、シダッタ、ここに座って。

シダッタ あなたは？

ダイバダッタ（無視する）。

アルバート 私はアルバートだ。どうして私
がここにいるかというとな、それはそれは
話が長くなる。まあしかし、ここには時間
という概念がないからいくら話しても。
ダイバダッタ シダッタ。この男と話しては

ならない。われわれの心をかき乱す。
アルバート なぜ、私に辛くあたる。時間と
はなんたるかを私に説明をして欲しいんじ
やなかったのか。

ダイバダッタ どうした、シダッタ。けがを
したのか。

シダッタ ちよつと足を。走ったんだ、ずい
ぶん。

ダイバダッタ どれ、診せてごらん。

シダッタ、困惑した表情で足を診せる。

ダイバダッタ ほら、横になりなさい。

ダイバダッタ、シダッタの足をもみ始め
る。

シダッタ 痛いよ。ちよつと、本当に痛いつ
て。

ダイバダッタ まあ、遠慮するな。(腰をも
む)

シダッタ 痛い。腰は痛くないよ。

アルバート 痛がつてるじゃないか。かわい
そうに。

ダイバダッタ あんたは黙ってらっしゃい。
・・・昔はな。シダッタ。昔は私がこつや

つて面倒を見たものです。

シダッタ あなたが？ 僕に。

ダイバダッタ そうです。

シダッタ？

アルバート け、また何かの生まれ変わりと
かいうんだろが。

ダイバダッタ (シダッタの腰をもみなが
ら) 2つ前だ。私が死んで、そしてまた死
んで今にいたる。・・・かつて、私はこの
お方の腰をもんでいた。

シダッタ 痛！・・・おじさん、マジ痛い
って。

ダイバダッタ ふー。私も年をとったかなあ。
力が入らん。

シダッタ 十分です。十分入ってます。

アルバート あ、また誰かがきたぞ。

ジーザス、現れる。

沈黙。皆、ジーザスをみる。

ジーザス ユダ・・・。

アルバート おい、誰に話しかけてる。

ジーザス ユダ。

シダッタ？

ダイバダッタ・・・（シダッタに力をいれる）。
シダッタ 痛い。おじさん、恨みでもあるの。

シダッタ、這ってその場を逃げる。

ジーザス （ダイバダッタに）ユダ。俺だ、ジーザスだ。

ダイバダッタ 私はダイバダッタという者だ。お前はユダという者を探しているのか？

アルバート あんた、ダイバダッタって言うんだ。初めて自分の名前を言ったな。

ジーザス ユダ。忘れてしまったか。お前はかつて俺のことを知らなかった。そして今も知らんと言う。

ダイバダッタ （笑う）ジーザスさんよ。たとえ私がユダという名前でも、ここでは何の役にもたたない。

ジーザス 役に立たない？

ダイバダッタ 名前って言うものは単なる約束だからだ。たとえばこの数珠を象と呼ぶとしよう。そういう約束をすればどうなる。

私は象を首から下げているのだ。そうだろう。仮に私をユダと呼びたければ呼ぶが正しい。それでお前と私の会話が成り立つならばな。

ジーザス （つぶやく）しかし、そっくりだ。アルバート どうやって、ここに来た。

ジーザス 俺は人を探していた。ミロクっていうんだ。俺が作ったゲームのチャット仲間さ。画面の中だけに生きてるはずなのに、突然現れた。それで、俺は追っかけてきた。

ダイバダッタ・・・。

ジーザス あなた達はいったい誰？ ここはどこ？

アルバート ジーザス君か。私はアルバートだ。確か、もつと長つたらしい名前があつたようだが・・・勝手にその坊主がそう呼んでるんだ。ダイバダッタだったといっただか？

ダイバダッタ ダイバダッタ？ そんなこと言つたかな？

アルバート さっき言つたばかりじゃないか。ダイバダッタ ふ、だから名前は関係ないんだ。

アルバート またそれが。シダッタ ジーザス、僕はシダッタといひます。よろしく。

ジーザス シダッタね。よろしく。俺は、ジーザス。ナザレのジーザスと言えば俺のこ

とき。

シダッタ ナザレの・・・。
ジーザス どうして君は寝転がってるの？
シダッタ いやその・・・（起きあがる）

僕も今、来たばかりなんです。暗闇を長く歩いていたもので、いろんなところに体をぶつけたみたいです。君も足を引きずってるけど。

ジーザス 途中でね。いやあ、人がいっぱい
でね。足を踏まれたのかなあ。

シダッタ 人がいるんですか。

ジーザス え？ 人なんてうじゃうじゃいるよ。

シダッタ 永久市民ですか？

ジーザス 永久市民？ とにかく街は人であふれてる。今日は俺らの家族の外出日だったんだ。

ダイバダッタ シダッタ。あなたが入滅されたあと、私たちは困惑した。そしてこのようなものたちが現れたのです。それをあなたは無視されている。

シダッタ？ 僕は家族のもとに帰らなくちゃいけない。父さんと母さん、そして妹が僕の助けを待っている。

ダイバダッタ シダッタ。それはできない。私はここで、お仕えるように、使者ガブリエルから言われているのです。

シダッタ なんのこと。僕はおじさんなんて知らないよ。

ダイバダッタ 私はあなたをここで待ち続けて7千も経った。

アルバート（笑う）7千。単位はないのか。それは、日にちか年月か。私のような科学者から言わせると・・・科学者？ はて私は・・・。

ダイバダッタ コウ（劫）だ。

アルバート こう？

ダイバダッタ コウだ。お前が聞いた単位のことだ。我々の世界の時間の単位だ。どうせ、想像もつかないだろうから説明せんがね。

ジーザス ユダ。

ダイバダッタ・・・！

ジーザス いや、ダイバダッタさん。さつきガブリエルって言ったよね。

ダイバダッタ 言ったね。ガブリエルは我々の使いだ。

ジーザス 僕の学校の先生はガブリエルっていう名前なんだけど。

ダイバダッタ ふ、そんな名前どこにでもあ

る。名前に価値などない。
アルバート ジーザス君。この男のたわごと
につきあっていると言が暮れるぞ。
シダッタ 日が暮れる？ そうだ、日は、太
陽は、どこにあるんです。ここは異常に明
るい。
ジーザス 空？・・・ 何も見えない。
ダイバダッタ ……。

間。

シダッタ アルバートさん。どのくらいここ
にいるんですか。
アルバート ああ、ずいぶん経つよ。どのく
らい時間が経ったか・・・何百日、何
年？・・・わからない。そもそも時間
というものは。

ダイバダッタ ははは、時間。あんたがかつ
て生涯をかけて考えていたことだ。皮肉な
ことだな。(笑)しかし、お前の理論は世
の中をかき乱しただけでなんの救いにもな
らなかつた。

アルバート 私は最初から救いなど求めてな
かつた。

ダイバダッタ いいや、あんたは救いを求め
ていたよ。

アルバート ……。

ダイバダッタ 毎日うなされていた。複雑な
計算式を並べて、我々の世界を説明しよう
とした。信仰も求めていた。世界中を旅し
て回った。しかし、信仰できずにいた。ず
つとだ。

アルバート 信仰？ (笑う) 笑わせるな。

ダイバダッタ ミロクがもうすぐお目覚めに
なる。それでようやく我々は救われるのだ。

シダッタ ミロク？

ダイバダッタ そうです。ミロクがお救いに
なります。ミロクは56億7千万年の瞑想
の後、覚醒されます。シダッタ。あなたが
予言したことですぞ。

シダッタ …… 予言。僕は、知らない。へ
んだな。おかしな夢ばかりをみる。繰り返
し繰り返し・・・家族をおいてきてしま
った。もう、食料も底をつきてる。早く行
かないと。

ダイバダッタ シダッタ、あなたは、あなた
の家族のためではなく、この世界すべての
救いを考えるべきなのです。

シダッタ 世界。僕がそんな大それたこと
できるわけがない・・・。お父さん、お母さ

んが待っているんだ。
ダイバダッタ シダッタ。あなたの世界に救いはありましたか。
シダッタ 僕の世界？
ダイバダッタ そうです。すべてがうまくいってないでしょう。それはそうだ。われわれの試行が失敗したからだ。

シダッタ、起きあがって、立ち去ろうとする。

ダイバダッタ シダッタ。お戻りください。

次の指示を待つのです。

シダッタ 指示？ 指示って誰の。

ダイバダッタ 我々の指示です。

シダッタ いやだ。僕は帰るよ。

シダッタ、足を引きずりながら去る。

アルバート 追いかけないのか。

ダイバダッタ 大丈夫。すぐに戻ってくる。

アルバート ジーザス、君は帰りたくないのか。

ジーザス 別に。どこも退屈なんだよな。うちに戻っても同じだよ。パソコンの画面とにらめっこばかり。俺はもっと刺激が欲しいんだ。刺激が。

アルバート そうか・・・（空を見上げる）
ダイバダッタ ジーザス、ミロクという名前をどこで知った？

ジーザス ミロク？ 学校みんな知ってるよ。ゲームのキャラクターさ。人気があるんだ。破壊の神だつてね。ここに来る前にたしか見たんだよね。残念だなあ。

ダイバダッタ それは虚像だ。ミロクはこれから6千後に現れます。

ジーザス さっきは56億つていつてなかった。

ダイバダッタ 言っていない。

ジーザス 言ったよ。

ダイバダッタ 言っていない！ お前の世界の単位と違うんだ。

アルバート （笑う）時間なんて関係ないつていうくせに、こういふときだけムキになるな。

ダイバダッタ 私は時を正確に刻んでいる。もちろん、あなたのいう相対的なものじゃない。そしてミロクが現れる、我々はミロクが覚醒するのをひたすら待っている。

ジーザス 待ってるだけなんてかったるいよ。

もつとさ、わくわくすることしようよ。ゲームじゃなくてさ。
アルバート ゲーム？ さつきから気になってるんだが、ゲームってなんのことだ。
ジーザス 俺の仕事さ。学校でならってるんだ。まだまださ、失敗ばかり。
アルバート ゲーム理論か。フォンノイマンとモルゲンシュタインの。
ジーザス 何、言ってるんだよ。ゲームって言えばゲームしかないだろ。
アルバート ゲームをクリアできなかったらジーザス それはリセットだね。また、最初からやり直しさ。
ダイバダッタ ジーザス、お前の役目は終わった。もう、リセットする必要はない。
ジーザス なんだって。
ダイバダッタ お前の仕事は終わりだ（共鳴）。
ジーザス ガブリエル先生？
ダイバダッタ お前はもう必要ない。
ジーザス 先生！ 俺を見捨てるおつもりですか！ 俺はゲームの最後に、十字架のパフォーマンスもやっただんですよ。それなのに。

子供たちの歌が聞こえる。

18場

「西暦2062年 カナガワ」

老父が、被爆したような真っ黒な服装で帰ってくる。

母 父さん、どうだった？
父2
母 そうよね。その様子じゃ。また同じね
父2 足跡を見つけた
母 それは何度も聞いたわ
父 . . . 今日ちょっと違う。煙が見えた。
母（ため息）シダッタは？ 一緒じゃないの。
父2 急な下り坂があつてね。それでシダッタを行かせた。
母 シダッタ一人に？ シダッタにもしものことがあつたらどうするの！
シダッタ あいつは大丈夫だ。見かけによらず、慎重だ。もうすぐ戻ると思うよ。

庸子、ぼろぼろの服を着て現れる。

庸子 父さん、今日はなにかあったの？

シダツタ 庸子、煙が見えたんだ。

庸子 ふうん。

母 庸子、具合どう？

庸子 お腹空いた。

父2 そうか、食欲がでたか。母さん、缶詰
すぐに開けてあげて。

母 庸子、コンビーフでいいわよね。

庸子 うん。

父2 しばらく雨が降ってない。水は節約し
て使おう。

母 ミネラルウォーターも、そろそろつきる
わ。

父2 早く、新しい場所を探さないとな。

庸子 あたし、もう動きたくない。

母 希望を棄てちゃ駄目。私たちの他にまだ
人はどこかにいるはずよ。

庸子 それでどうするの。

母 どうするのって。

庸子 人がいたとしても、同じって事よ。私
たちと同じ難民なんですよ。

母 だから・・・とにかく会うのよ。そして
協力しあうのよ

父2 そうだそして町を作るんだ。そしてま
た昔のように幸せに暮らそう。

庸子 お父さんたちよくそんなのんきなこと
言ってられるわね。あの大きな地震がおき
てから、もう、何日経つてると思ってるの。
人っ子ひとりいないし、動物だつていない。
虫だつて一匹も見かけないじゃない。

父2 俺たちはな、運がよかつたんだぞ。そ
れで生き残つたんだ。

母 そうよ。私たちだけが助かった。それは
神様のおかげよ。

庸子 神様？ 神様はもう死んだつて聞いた
わ。

父2 神様が死んだなんて誰がいつたんだ！

庸子 ……

父2 誰がそんなこといつたんだ！

母 あなた！

庸子 ……お兄ちゃん。

父2 シダツタか…。

母 神様は死んだ。でもまた次に神様が現れ
る。そして私たちを救つてくださるのよ。
きつとそうよ。ねえ、お父さん。

父2 庸子、お前は学校で化学を習つただる
う。

庸子 ……

父2 水は酸素と水素からできると知っているね。今は誰だっただけを疑わない。実験してみると本当にそうなんだからね。けれどもね。昔は、水を水銀と塩でできるといったり、水銀と硫黄でできるといったり、いろいろ議論をしたんだ。神様も同じだ。みんながめいめい自分の神様が本当の神様だというだろう。そして神様なんていないと言う者もいる。でもな。お互い、他の神様を信じる者、神様すら信じない者のしたことで涙がこぼれるだろう。それからお互いの心が良いとか悪いとか、議論するだろう。そして、結局、勝負がつかないだろう。

庸子 お父さん、何をいつてるの。私はね。
父2 しかしだね。本当にお前が勉強して、実験のように本当の考えと嘘の考えを分けず、まじまじに、その実験の方法さえ決まれば、もう信仰も化学と同じようになるんだ。わかるかい。

庸子 ……分らないわ。私は現実に生きてるの。私たちは助かった。でも、ほんとに助かったの。助かったのは滅んでいった人たちの方じゃないの？ 私たちは取り残された。

母 お父さんが私たちをキャンプに連れて行ってってくれなかったらどうなっていたでしょうね。ねえ、お父さん。

庸子 私は最初から行きたくなかったの。無人島のキャンプなんて。

父2 無人島のキャンプに行きたいといいたしたのはシダッタだ。そのおかげで私たちは生きています。シダッタに感謝しないとな。
庸子 感謝？ その逆よ。こんな悪夢のような世界に閉じこめられて何が感謝よ。もしかしてここはあの世？ 私たち死んだの。母 やめて！ もういいわ、そんなこと考えてもどうしようもないんだから。…さあ、缶詰をあげたわ。庸子、食べなさい。

シダッタが帰ってくる。

シダッタ たいへんだ！ 町だ、町があった！

父2 それで！ それでどうだったか！
シダッタ いるよ！ 人だよ。いっぱいいる！

父2 あの煙のでたところか
シダッタ 違うよ。あそこまで行けなかった。でも途中で空洞をみつけた、地下に通じて

るんだ。町は地下にあるんだよ。たくさん人が歩いてたし、工場みたいな建物も見えた。中はとっても明るいよ。きっと人工灯だ。まるで未来の地下都市だ。
シダツタ よし、すぐに行こう。母さん、支度しろ。人だ、人に会えるんだ。
母 庸子、動ける？
庸子 ……。
父2 遠いのか？
シダツタ いや、すぐ近くだ。父さんと分かれた直後に見つけたんだ。あそこだよ。
父2 そうか、あそこに空洞があったのか。
庸子 行きましよ。日が暮れる前に。

19場

「西暦2802年 トウキョウ」

朝。

シエルターの中。

人工的な光で作られたすがすがしい朝。
父、ファーザーと母、マザーがベットに横たわる。

マザー 子供たちは起きたかしら。

ファーザー (あくびをしながら) まだ寝てるよ。

マザー ジーザス！ ジーザス！

ファーザー そんなに大きな声を出さなくても。

マザー ジーザス、起きてるの、ジーザス。

ジーザス、登場。

ジーザス 母さん、何だよ。なにかあったの？

マザー ジーザス…。

ジーザス どうしたの、そんなに驚いて。

マザー よかった、無事なのね。

ジーザス 無事も何も無いよ。今、ちょうど朝食だったんだ…。

マザー あなたがいなくなった夢をみたの。

すごくリアルで…。

ファーザー 夢？ 夢をみたのか？

マザー うん。

ジーザス 夢って現実じゃないんでしょ。そんなに大慌てしなくても。

マザー マリアは？

ジーザス 寝てるよ。起こす？
マザー 居るのね、マリアは。
ジーザス 居るよ。なんなの母さんは。

ジーザス、去る。

フアーザー 気をつけないとな。

マザー え。

フアーザー 夢だよ？ お前まだそんなもの
みるのか？

マザー ……。

フアーザー 夢はいけない。他人が知ったら
大変だ。…きつと眠りが浅いんだな。
今度先生にいつて、睡眠剤、強いのに変え
てもらおう。

フアーザーは、パソコンの画面の前に向
かう。

フアーザー 大変だ。今日は外出日だ…
母さん、外出日だよ！ おい、ジーザス！
ジーザス！

ジーザス、登場。

ジーザス 今度は父さん？ いったいどうし
たの？

フアーザー マリアは？

ジーザス だから、寝てるって。

フアーザー 父さん、チェックし忘れてた。

今日は外出日だぞ、すぐに用意しろ。

ジーザス 外出日？ マリアは行きたがら
ないと思うよ。

フアーザー どうして。

ジーザス つまんないって言うんだ。

マザー あら、つまんないって？

ジーザス マリアは本当の空がみたいって言
うんだ。外出しても外はほとんど暗闇でし
よ。僕も同感だよ。

マザー いきましょ。今度はいつになるかわ
からないから。

フアーザー そうだぞ、外出日。今は週に一
回あるからいい。けど、噂によるとな、来
年からは月に一度になるかもしれないん
だってさ。

ジーザス ほんと？

フアーザー ああ、ほんとだ。これからはど
んどん外出できなくなる。…（パソコ
ンの画面をみながら）おい、運がいいぞ。
今日は上空の空調室が開く日だ。もしかし

て本物の空がみえるかもしれない。
マザー ね、すぐに用意して。
ジーザス うん。
マザー マリアをすぐに起こしてね。
ジーザス はい。

ジーザス、去る。

マザー 月に一回の外出なんていやだわ。
・人ってそんなに増えるものなのかしら。
ファーザー そのうち子供もひとりまでしか
もてなくなるだろうな。
マザー いやよ！ あたし、ジーザスもマリ
アも手放したくないわ！
ファーザー あわてるな！ まだ決まった訳
じゃない。

マリアとジーザス、現れる。

マリア おはよう。
マザー・ファーザー おはよう。
マザー マリア、顔ぐらい洗ったら。
マリア ・・・。
マザー 女の子なんだから身だしなみくらい
きちんとしないと。外出日なんだから。
マリア お母さん新しい服買ってくれる？
マザー 服？ 服が欲しいの？
マリア ほら、駄目なんでしょう。
ファーザー 駄目とは言っていないぞ、でも今
着てる服を捨てないとな。
マリア いやだ。これ気に入ってるんだから。
ファーザー だったら我慢しないとな。
マリア ・・・。
ジーザス マリア、朝食打ったか？
マリア 今日はいいいよ。休みだし。
マザー 駄目よ。ちゃんと摂取しないと。
マリア だって、痛いんだもん・・・。
マザー 朝食、すぐに打ちなさい。
マリア お母さんだって打ってないでしょ。
マザー 大人はいいの。あなた育ち盛りなん
だから。
ファーザー そうだぞ、病気になったらどう
するんだ、一緒に住めなくなるぞ。
マザー そうよ。お母さんたちはね。いじわ
るで言ってるんじゃないの。
ファーザー AB2号棟のさつきちゃん知っ
てるよな。風邪をひいて、病棟送りだ。
マリア さつきちゃんが・・・。
ファーザー そうだ。かわいそうにもう二度
と会えない。

マザー さ、打ってきなさい。
マリア ……はあい。

マリア、去る。

ジーザス 父さん、今日僕、粘土買っていい？

ファーザー 粘土って、あのねばねばした、あの粘土か。

ジーザス そう、粘土。立体図形っていつも画面の中だけでしょ。実際に作りたくって。ファーザー 何をつくるんだ。

ジーザス 杯(さかづき)だよ。

ファーザー 杯？ ってコップのことか。

ジーザス そうだよ。聖杯を作るんだ。本当は、ろくろもほしいんだけどなあ。

ファーザー ろくろ？ ろくろってなんだ。

ジーザス いいよ。ずいぶん大きいんだ。場所とるから。

ファーザー そうか、今日は我慢してくれ。

しかし、粘土はいいよ、買ってやろう。

ジーザス やった！ 父さん、ありがとう。

ファーザー その代わり、先週買ったプラモデル。

ジーザス はあい(がっかり)……。

マザー 私は、香水が欲しいわ。香水ならいいでしょ。場所をとらないし。ね。いいでしょ。

ファーザー もちろん、でもあんまり臭いのきついのはいやだな。

マザー わかってるわ。

マリア、戻ってくる。

マリア 朝食打ったよ。いいよ。準備オツケい。

ファーザー じゃあ、出かけるか、ジーザス。

マリア、母さんもいいか。

マザー はい。

ジーザス うん。

ファーザー じゃあ、ハッチを開けるぞ。

20場

このシーンは次の場と交互に同時進行する。

一行は、歩いている。

空洞があった場所にくる。

シダツタ おかしいな。確かここに大きな空洞があったんだ、大きな入り口が。

父2 シダツタ、場所を間違えたんじゃないか。

シダツタ 間違えない、確かにここだ。

父2 ここに穴があいていたんだな。

シダツタ うん、でっかい穴だ。落ちたら助からないほど、深い穴だ。穴の中には近代的なビルが建ち並んでいるのが見えた。

母 ここはどう見ても、窪地にしかみえないけど・・・

父2 シダツタ・・・

シダツタ 違うよ、嘘なんかついてない。本当なんだ。本当にここに大きな空洞があったんだ。

父2 すまんな。お前ばかりに歩かせて、父さん明日からは自分の足で探すよ。

母 疲れて幻覚をみたのね。さあ、帰りましよう。また明日出直せばいいわ。

シダツタ 本当なんだよ。ねえ、信じてくれよ。

父2 ああ、信じる信じるとも。でもお前はゆっくり休んだ方がいい。明日また、ここにこよう。

庸子 兄ちゃん、ありがとう。少しの時間だったけど私、とても元気になれたわ。

シダツタ 庸子まで・・・僕を信じてくれ。

父2 ちょっとまって、この窪地、変だぞ、ほら、真ん中に・・・ここからまっすぐに亀裂がはいってる。

母 ほんと、光よ。下から光が漏れてるわ。シダツタ そうだここだ、さっきまでここが開いていたんだ。

ゴゴゴと音がする。

父2 地震だ。でかいぞ。

シダツタ 違う。ここが開くんだ、危ない。

父さん、早く、ここから逃げないと。

母 庸子、急いで。

庸子 うん。

辺り一面、光につつまれる。

シダツタ 父さん、僕ここから降りてみるよ。

父2 シダツタ、やめろ、危ない。

シダツタ また、閉まるかもしれない。今しかチャンスはないんだ。いくよ。

母 やめてシダツタ。

シダッタ、光の中に飛び込む。

父・母 シダッタ！
庸子 兄さん！

シダッタが飛び込んだ直後に、扉が閉まる。辺りは真っ暗になる。

暗闇をシダッタが歩く。

21場

このシーンは前の場と同時進行する。

家族4人はびつたりくっつき一列になって、歩いている。

たくさんの人々の喧噪。

真っ暗っ暗闇の中をベルトコンベアーが移動する。

ジーザス また人が増えたんじゃない。

ファーザー そうだな。ジーザス、手を離すなよ。

ジーザス うん。

マザー マリア、何を買う？

マリア 別にいいわよ。私は。

マザー リボンにしましょう。お母さん、か

わいいの選んであげるから。

マリア ……

マザー お父さんは。

ファーザー 俺か？ 俺は・・・考えてなかったな。本当はクツションが欲しいんだけど、もうちよつとまとうかな。

マザー 大きいの？

ファーザー いや、分かってる。我慢するよ。ジーザス いいよ父さん、あさって誕生日だ

る。思い切って大きいの買ってよ。その分

僕の椅子、捨てるから。

ファーザー お前、いつからそんないい子に

なった？ 泣かせるね。

ジーザス 誕生プレゼントね。

マリア 兄さん、あの椅子飽きたって言って

たもんね。

ジーザス お前はよけいなこと言わなくていいんだ。

皆、笑う。

ジーザス あ、上を見て、空だ。空が見える

よ!

マザー ほんとうね。懐かしいわ。マリア、みて、本物の空よ。

マリア あれが本当の空? 小さな穴みたい。パソコンで見たのとは全然違う。

フアーザー 空の一部だ。昔はな、あれが一面に広がっていたんだぞ。

マリア 一面って?

フアーザー え? 一面って空一面だ。いっぱいだ。

マリア よくわからないわ。

マザー そうねえ。雲もあつたわ。

マリア 雲?

フアーザー (上を見上げて) しかし、母さん、空はほとんど見えにくくなるなあ。青さもほとんど残っていない。

マザー そうですね。(上を指さす) あのとりに新しいシエルターができたんですね。

フアーザー 空か。父さんが小さい頃はいつでもみることができたんだけどな。一面に真っ青だった、気持ちよかつたぞ。

ジーザス 鳥は?

フアーザー いたな。すずめって言うんだけどな。いつか一緒に博物館に行ったときあつただろ。小さな鳥だ。あれがいつぱいた。

ジーザス お母さんはすずめ見たことある? マザー あるわよ。あと、ツバメね。かつこ

よかつたわよ。すーと低く飛ぶのよ。

マリア 私知ってる。生物の時間に習った。

ツバメって渡り鳥って言うんでしょ。

マザー 偉いわ。よく勉強してるわね。

マリア 鳥たちはどうしていなくなつたの?

フアーザー 食べ物がなくなつたんだろう。

虫を食べるからね。私たち人間と違って栄

養剤を注射することなんてできないからね。

ジーザス 上の階に住んでる人はもっと空が

大きく見えるのかなあ。父さん、行ったこ

とある?

フアーザー ないなあ。上の階はとつても偉

い人が住んでるからな。お金持ちとか、政

府のえらい人にならないと駄目だ。

ジーザス ふうん。

フアーザー ジーザス、お前も上に行きたい

か。

ジーザス いいよ。たくさん勉強しないと

けないんでしょ。僕はこのままでいい。

フアーザー 欲がないな。こう欲がないって

言うのも・・・。

マザー ジーザスが子供くらいの頃から食事に抑制剤が入ったでしょ。だから。
ファーザー し、母さん。政府の批判は駄目だ。

マザー 私たちの小さい頃は将来何になりた
いか。語ったものだったわね。夢の話とか
ね。

マリア 夢？

マザー そうね・・・大きくなったらどんな
風に！。

ファーザー やめないか！ 外出中なんだぞ。
マザー・・・。

ファーザー すまん、つい大きな声を・・・
いや、モニターをされてるとまずいと思っ
てな。

ジーザス この会話も聞かれてるの？

ファーザー この管理システム、プログラマ
ンは万能だ。これ以上の発言は減点対象に
なるかもしれん。

マザー いやね。それなら辞書から夢（小さ
く）という項目を消してしまえばいいのに。
ファーザー そんな言葉、もう消されてる。

マザー ええ！ 確かこの前見たときは。

ファーザー ないよ。とうの昔だ。

マザー 知らなかった。

マリア あ、あつちが明るくなった。もうマ
ーケットに着いたのかな。

ファーザー 先週より時間が短くなったな。

いや、太陽だ。太陽が差し込んでるんだ。
ジーザス 太陽って。

ファーザー 今日についてるぞ。ジーザス。

マリア、よく見ておけ、あの光が太陽だ。

ジーザス あれ、ミロクじゃないか。

ファーザー ジーザス、ミロクってなんだ？

ジーザス チャット仲間だよ。

ファーザー チャット？

ジーザス 一度も会ったことないけど、わか
るんだ。感で。ほら、あそこ。

ファーザー・・・？

ジーザス（両手をあげて）おーい。ミロク、
ミロクよ！

マザー ジーザス。駄目よ。今手を離れたら、
迷子になるわ。駄目！ ジーザス、勝手に
進まないで！

ジーザス ミロク！ 俺だよ！ ハンドルネ

ームはナザレのイエスだ！

ファーザー ジーザス！ ジーザス！ もど
ってこい。

ジーザス 大丈夫！ 大丈夫！ おーい、ミ
ロクよ！

マリア お兄ちゃん！ どうしたの？
マザー ジーザス！ 戻りなさい！
マリア お兄ちゃん！
ファザー ジーザス！ ジーザス！

あたりが真っ暗になる。
風の吹く音。

22場

「西暦2005年 東京」

輸入代行会社。

電話がまばらに鳴っている。

岸川がまっかな顔をしてソファーに横たわる。柴も、辛そうに椅子に腰掛け目をつむる。布川もまっかな顔をして、机の前に座り、うつらうつらしている。社長、は顔を紅潮させ、酒を飲んでいるようにハイである。

花岡だけは電話で熱心にセールストークをしている。

小林、課長と係長はいない。

高井はなにやら書類の整理をしている。

佐竹が登場。

佐竹 おはようございます。

社長 おお、いい男。おはよう。

佐竹 どうしたんですか、みんな酔っぱらってるんですか。

社長 馬鹿、仕事だよ。

佐竹 仕事？

社長 こんどな、GHBもやろうと思ってるな。

佐竹 マジックマツシユルムですか？ 渋谷とか 池袋で売ってた？

社長 あれは、もうだめなんだよ。法律で禁止されてるから。マジックマツシユルムの次になる薬をさがしてるんだ。おまえもやってみるか？

佐竹 いや、ぼくはいいです。

社長 社員がわからなくて商品は売れないからな。

佐竹 でも、真昼間からこれは・・・。

高井 すみません、柴さんに電話なんですけど。どうします。

布川 (ラリって) 柴君、しーばーくん。

社長 柴、電話いけるか？

柴 (手を横に振って)

社長 駄目か？ コールバックっていつて。
高井 コールバック。わかりました。もしも
し、柴はただいま席をはずしておりまして、
折り返し……

佐竹 ああ、岸川さんまで、大丈夫です
か？ 社長、寝ちゃってますよ。岸川さん。
マジックマツシユルームってすごいですね。

社長 ちがうよ、GHB。
佐竹 ニュースで言ってますよ。女子高生
が死んだって。インターネットで買ったら
しいですよ。

社長 佐竹。なにびくついてるんだよ。加減
なんですよ。GHBは自分の適量がわから
ないといい気持ちにならないんですよ。

佐竹 あれ、小林さんは……？

社長 布川君、小林、どうなってる。

布川 ああ、ああ小林君。（気持ちよさそう
に）さつき電話がありました。お腹が痛く
て、遅れてるらしいです。

社長 お腹が痛い？ お腹がいたくて遅刻で
すか。子供じゃないんだから、まったく。

布川 佐竹君、小林君の携帯に電話してみ
て。

佐竹 はい。（電話しようとする）

社長 ちよつとこい、いい男……佐竹！

佐竹 は、はい。（電話機を置いて）

社長 来なさい。

佐竹 はい。

社長 これですね。これも扱うかどうか検討
してるんですよ。（海外の薬の瓶を取り出
す）英語で書いてあるんだけど。訳して。

佐竹 はい。直訳でいいですか。

社長 なんでもいいよ。意味がわかれば。

佐竹 （大声で）ええと、アマウントパーサ
ービング……これは成分か……このク
リームは男女間の交渉のために、いわゆる
セックスの・ええ……

高井 （書類をめくる手がとまる）

社長 待て、佐竹。女性がいるから小さな声
で。

佐竹 はい。

社長 要するに夜のための薬ね。それで、服
用するの。

佐竹 えーとフィンガーティップス。ははあ、
指先にね……いや、服用じゃないです。
塗るみたいですよ。

社長 飲むんじゃないのか？

佐竹 （大声で）微量を指の先につけて、女
性の壁に、塗る。壁というのは……あそ
こですね。つまり。

高井 ……

社長 し、もっと小さい声で。
佐竹 壁に塗るとですね。絶妙の気分が得られます。つて。書いてありますね。要するに性感クリームですね。
社長 何回分って書いてある。
佐竹 うーん。コーション。注意書き、子供の手の届かないところにおいてください。しか書いてませんね。
社長 (佐竹から薬の瓶をとりあげ) ふうん・・・売れるかな。
佐竹 さあ。
社長 ありがと、もう席に戻っていいよ。
佐竹 はい。・・・小林さんの携帯の番号はと・・・。

高井、佐竹のそばに来てため息をつく。
佐竹は小林に電話をする。

佐竹 ああ、電波の届かないところにいるつて。だめだ。
布川 ああ・・・じゃあ、もうくるよ。
高井 (小さな声で) 佐竹さん。
佐竹 え？
高井 すごいですね。この状態ってやばくないですか。
佐竹 あの、巨漢の岸川さんが寝ちゃってるからね。
高井 そういうことじゃなくて。いや、そういうことなんですけど・・・。
佐竹 気にしない、気にしない。気にしてたらここでバイトできないから。
高井 はあ。

課長と、係長が帰ってくる。

課長 ただいま。
社長 ごくろうさん！
係長 だだいま。
社長 ごくろうさん。
佐竹 あ、お疲れさまです。
課長 どうしたのみんな。なんか変。
社長 仕事ですよ。今度の商品試してるの。
課長 ・・・・。
係長 今日の振り込み、ここ置いておきます。
社長 小林、見なかった。
係長 コンビニでお弁当買ってました。もうすぐ来ますよ。
社長 弁当？ あのやろう、腹が痛いんじゃないのか。なめやがって。
高井 布川さん、できました。(書類を渡

す)
布川 へ・・・(うとうとしながら)ああ、
ありがとう。
高井 (佐竹のところに行く) 普段まじめな
布川さんが・・・酔っぱらってる・・・。
佐竹 (笑う)
高井 なんなんですか。この会社は。
社長 花岡! 声はれ、声!
花岡 はい。
社長 今月、ノルマいかなかったら平に降格
だからな。
花岡 ……。
社長 花岡、今週はとくとくパック何件。
花岡 え、開業とくとくパック。5件です。
社長 みんなでか。
花岡 いや、私です。
社長 お前の成績聞いているんじゃないよ。お
前営業主任だろ。
花岡 はい。みんなあわせると、柴君と岸川
君で。22件。です。
社長 ほう。小林は。
花岡 え? 小林君は・・・。
社長 ゼロか。
花岡 まあ・・・。
社長 ……。

小林が入ってくる。弁当を片手に黙った
まま席に座る。

佐竹 啓ちゃん、これ(漫画を返す)。
啓介 あ・・・。
佐竹 ねこごるの旦那の漫画。いいね。笑え
るね。強烈だよ。
社長 小林!
小林 あ・・・はい。
社長 こっちに来い。

小林、社長のもとへ。

社長 遅れてきたらまず、私のところに挨拶
だ。
小林 あ・・・すみません。
社長 あ、すみませんじゃないよ。まったく。
小林 おはようございます。
社長 おはようございます? 何時だと思っ
てるんだよ。
小林 はい。
社長 何度も言うようだけど。お前を雇うの
にいくらかかかっていると思ってるの。
啓介 ……。

社長 え、小林よ。・・・もういい。今日は朝から新商品のモニターしてるんですよ。電話がとる人が少ないんですよ。早く仕事して。

小林 はい。

社長 あれ、ここに毛布あるけど、啓介、昨日泊まったの。

啓介 え？ ええ。徹夜しましたから。

社長 偉い！ 聞いたか、小林。啓介は昨日、徹夜したんですよ。

啓介 う・・・その、データベースを直していい。

社長 啓介、やるじゃないか。

啓介 はあ。

高井 啓介さん、いいですか。

啓介 え？ あ、なに。

高井 ここんこと色が出ないんですけど。

啓介 ああ、プリンターの設定ね。昨日・・・いじったから、いますぐ直します。

高井 お願います。

社長 そうだ、課長。おっぱい大きくなっ
た？

高井 ！（書類を落とす）

課長・・・ええ、最初の1週間は。でも今週に入ってまた縮みました。

社長 そうか、効果があったか。

高井 （佐竹のところいき）なんなんですか。セクハラですか。

佐竹 （笑う）ほら、この前言った、アツプレスト。あれ試してるみたいよ。

高井 胸の大きくなる薬。

佐竹 そうそう。

高井 ええ、この会社みんな社員が試すんですか？

佐竹 さあ、僕と啓ちゃんはやったことないけど。

啓介 いや、やったよ。ミレグロ。

佐竹 ああ、一度やった。第2のバイアグラ。ミレグロ、飲んだね。

高井 ここで飲んだんですか。

佐竹 そうよ。だって社長が飲めっていうんだもん。あれ以来二度と飲みたくないね。

啓介 あれは変な気分になった。

佐竹 なったね。僕は背中から汗がでてきた。

布川 あああ、あああ。（あくびをする）

高井 やっぱり変、みんな。

岸川、突然、飛び起きる。

岸川 あ、あああ（背伸びする）よし！

岸川でていく。

高井 どこいったんでしよう。

佐竹 トイレじゃないの？

啓介 高井さん、今、直してきましたから。色。プリントできます。

高井 あ、はい。ありがとうございます。

入り口から道安が現れる。スーツ姿に、首からおおきな数珠のようなものを下げている。

道安 こんにちは。（両手を合掌しながら）

高井 いらっしやいませ。

社長 おお、道安先生、よく来てくれました。

課長・係長 こんにちは。

道安（ラリっている柴を見て）ん？

社長 高井君。お客様にすぐにお茶入れて。

高井 はい。

道安 ああ、気にしないでください。時間ないですから。この書類渡しにきたただけですから。

社長 どうぞこちらに。

社長と道安は会議室に消える。

啓介 誰？

佐竹 印刷屋さんみたいよ。

啓介 印刷屋？ ふうん。でも先生ってよんでたね。

佐竹 ほら、年末の納会にも来てたじゃん。

啓介 ああ、そうかそうか。思い出した。どつかの坊さんかと思っただ。

課長（電話をとり）キャサリン！ キャサリン！ 電話！ あれ、キャサリンは？

佐竹 岸川さん、トイレです。

課長（電話の相手に）ごめんね。今、キャサリン、トイレみたい。すぐにかかけ直すよ。うに言うから。

岸川が戻ってくる。

課長 あ、キャサリン！

岸川 あら、課長。何かしら。（体をくねらせながら）

課長 今、電話あったのよ。藤本社長。

岸川 ああ、そうなの。じゃあ、すぐにかかけ直すわね。ありがとう。

高井！（お茶のふたを落とす）

係長 高井さん、大丈夫。
高井 ああ、すみません。
係長 あたしがお茶入れるから、仕事続けて。
高井 でも。
係長 今、いらつしやった方。大事なお客さまだから。ね。
高井 すみません。お願いします。

係長、お茶を入れ始める。

高井は、佐竹のそばにくる。

高井 岸川さんつてこれ（おかまの手）だつたんですか？

佐竹 （笑う）

布川 高井君、高井君。

高井 はい。

布川 ああ、なんでもない。（寝る）

高井 ……（啞然）

佐竹 駄目だ、布川さん、今日は使い物にならない。

啓介 相当、飲んだのかなあ。

佐竹 さあ、何の薬だろう。

啓介 ダウナー系かな。

佐竹 アッパージャやないことは確かだね。寝ちゃってるし。

高井 なんですか、アッパージャ。

佐竹 アッパージャがハイになる薬。ダウナーがとろんとする薬。つまり、覚醒剤がアッパージャ、マリファナがダウナーね。

高井 げ、そんなの飲んだことないから、分かんないですよ。

佐竹 だよね（笑う）。

社長と道安が出てくる。

社長 いや、先生、本当助かりました。

道安 困ったときはお互い様だから。

社長 いや、なんと申し上げていいやら。

道安 そんなこと言わないでくださいよ。長年のつきあいじゃないですか。

社長 いや、本当に。皆様にもよろしくお伝えください。

道安 支部長、また、顔出すよ。今日は時間がなくて失礼。じゃあ、今度の日曜日。弥

勒院で。

社長 はい、日曜日に弥勒院で。花岡君！

道安 先生がおかえりですよ。

花岡 （電話を片手に）あ、お帰りですか。

（電話の相手に）すみません、少々お待ちを。

道安 では。(合掌する)
社長 (合掌する)
花岡 (かけより) ありがとうございます。
(合掌する)

高井、合掌する姿をみて、不思議そうにしている。

高井 佐竹さん、家で携帯とかメールやってます？

佐竹 うん、もちろん。

高井 メールアド教えてもらっていいですか。

佐竹 うん、これね。(紙に書く) やったー

メル友ね。うれしいなあ。

啓介 佐竹っちずるい。自分だけ。

佐竹 わかった、これ啓ちゃんのメルアドね。

一緒に書いておく。

高井 ありがとうございます。なんかここで

聞けないことたくさんあって。バイトは佐

竹さんだけだし。

佐竹 はは、ここ変だからね。いつでもメ

ールちょうだい。

啓介 僕ちゃんも。ほしい。

高井 はい、たぶん、今日します。というか、

いろいろ謎が解決しないと明日、ここにくる気分にならないような気がします。

社長、外に向かつて吠える。

社長 俺は負けんぞ！ よし！ 俺は絶対負

けん！ 今まで、いろんな試練を乗り越えて

きた、駄目だと思つたことはなんどもあ

つた。でも大丈夫だった。こんどもいける、

やれる、がんばれる・・・うん、うん、う

ん。なーむー。なーむー。

高井 社長何やってるんですか。

佐竹 ああやって、自分に言い聞かせてるの、

自己催眠ってやつ。

高井 ああ、自己催眠ってああやってかける

んですか。

佐竹 (笑う) 社長のは自己流だから。

社長 よし、みんな聞いて。会社の人事体制

をたつた今から変える。まず、柴、柴、起

きてるか。

柴 はい。

社長 柴、営業成績3週連続ダントツトップ

だ。約束通り部長にしてやる。これからは

テレアポだけでなく営業戦略を積極的に

考えてもらう。

柴 はい・・・ありがとうございます。(眠

たげに)

社長 係長、聞いてた。柴に、部長の名刺ね。

係長 はい。

社長 営業部部长つていれてね。

係長 はい。

社長 岸川！

社長 はい。

社長 お前、外の営業任せる。外回りの主任だ。外商担当主任だ。

岸川 外回りですか。

社長 外回り嫌いか。

岸川 いや、喜んで。

社長 飛び込み営業頼むよ。

社長 花岡。お前、営業部主任。

花岡 社長、それって前と同じですね。

社長 なんだ文句あるのか。お前の奥さん美人だろ。満足してるか。

花岡 はい、十分満足してます。

社長 そう、それでいいんだよ。

花岡 . . . ?

社長 営業部は、今からこの体制で行くからね。そうだ、布川君、なんか肩書きがあるなあ。営業本部長なんてどうだ。

布川 肩書きで仕事ができるんならほしいですけど . . . 私には必要ありませんから . . .

社長 いうねー。肩書きがいらぬ。

布川 肩書があつたら、何倍もの仕事ができるかって言うとそうじゃないでしょう。だから私はいりません。

社長 まあ、布川君が言うんじゃしょうがないな。でだね。問題は小林だ。花岡、あれを見せてみる、テレアポの管理表。これ小林のやつね。一昨日、26件の資料請求者に対して、契約がゼロ。昨日も8人の資料請求者に対してゼロ . . . どうする。これじゃあ、うちが何百万もだして、宣伝広告してるのがぜんぶ水の泡だ。

小林 . . .

社長 さっき来たお客さん、道安先生。先生の紹介でね。代議士の小川道夫先生を通してもらった。それで富士銀から融資が受けられることになったんだよ。だから、これからどんどん利益をあげないといけない。

柴、岸川、布川は、眠たげであんまり話を聞いてない。

社長 今日はいいや。詳しくはまた、後で話す。じゃあ、みんな。仕事して。

小林 . . .
社長 小林、ちよつと、こつち来い。
小林 はい。

小林、おそろおそろ社長のもとへ。

社長 なんだよ、これは。

小林 すみません。

社長 すみませんじゃないよ！ どうして
れるんだ。これみる、この媒体に200万、
この媒体 . . . ビジネスチャンプ、起業マ
ガジン。サイドビジネス独立マガジン、こ
れに100万、週刊現代、この媒体もこの
媒体も。うちの会社がこれだけ広告をだし
て、初めてここに資料請求してくるんだよ。
おまえ、それを全部ドブにする気が。ゼ
ロって何だ。ゼロっていうのはなんなん
で
すかつて、きいてんだよ。え！

小林 . . .

23場

シダッタ、暗闇を彷徨う。

シダッタ おかしい、道がない。僕はどこを
歩いているんだ。

アルバートがふつと浮き出たように現れ
る。

アルバート シダッタ。どこに行く。

シダッタ アルバートさん。

アルバート 私と一緒にいかないか。

シダッタ え？ どこに。

アルバート ミロクの所だよ。

シダッタ ミロク。僕たちを救ってくれると
いう。

アルバート そうだ。あのダイバッタとい
う坊主がしつこいぐらい言ってるあのミロ
クとやらだ。

シダッタ 救世主、ですか。

アルバート 救世主？ (笑う) 科学以外、

私はまったく信じちゃいないがね。

シダッタ でも、どうやって。

アルバート ははは、時間も距離もここでは
関係ない。

シダッタ でも . . .

アルバート 君だったらいけるだろう。

シダッタ 僕がどうして。

アルバート ここに入ってこれたからだ。こ
こは私が特別に作った場所だ。

シダッタ・・・。

アルバート あいつらは私のじゃまをする。

私が真実を探ろうとするのをひたすら妨害
する。罠をしかけてくる。

シダッタ 罠・・・。

アルバート ここにはな。ダイバダッタと同
じような奴はまだまだ、たくさんいる。何
千、何万とな。そして私がミロクのもとに
行くことを阻止しようとする。

シダッタ 人がいるんですか。そんなにたく
さん。僕はその人たちに会いたい。

アルバート ああ、会いたいなら会うがいい
さ。しかし、それはいつでもできる。それ
より、もつと大切なことがある。あいつら
が固く信じているミロクというものが本物
かどうか確かめる必要がな。

シダッタ・・・。

アルバート 道だ。見えるだろう。

シダッタ 道、ですか・・・。

アルバート ここは闇ではない。私には君が
見える。さあどうしてだ。

シダッタ さあ。

アルバート 光があるからだ。あそこから、
光がさしているからだ。光がなければ私た
ちはお互いの存在を確かめる合うことすらで
きない。

シダッタ するとあの光が。

アルバート おそらくな。ミロクのいる方向
はあちらだ。それしか考えられない。光の
方向に進むんだ。

シダッタ・・・。

アルバート それでだな・・・し！ しまっ
た。誰かから聞かれた。

シダッタ・・・？

アルバート 誰だ。そこにいるのは。出てこ
い。盗み聞きはたちが悪いぞ。

ジーザスが現れる。

ジーザス みつかっちまったか。

アルバート ジーザス。どうしてここがわか
った。

ジーザス 思い出したんだよ。あんたが俺の
ゲームに登場したのをな。でも、あんた途
中で死んだよ。ほんとあつけない死に様だ
った。

アルバート もうゲームは続けないのか。

ジーザス 俺のゲームは途中で終わった。だ

からリセットしてやったさ。(不敵に笑う)・・・しかし、今、思えば退屈なゲームだった。

アルバート ダイバダッタは？

ジーザス あの坊主か。瞑想とかなんとかいうらしいが・・・まあ、さぼってるんだよ。俺はあんなに一生懸命ゲームに専念したのに。あいつはただひたすら座っているだけだ。・・・おい、シダッタ。俺と一緒に来るんだ。

アルバート シダッタは駄目だ。これから私といくんだ。

ジーザス こいつは行くとはまだ言っていない。なあ、シダッタ。お前、このオヤジと一緒にいくのか。

シダッタ・・・いや・・・僕は。

アルバート・・・。

ジーザス ミロクのもとには俺が先に行く。そして奴を殺す。皆が俺の再来を望んでいい。しかし何だ。人々は俺はもう必要ないといっている。・・・俺が死んだ、もういないという者も現れた。今まで俺に助けてくれ、助けてくれと、泣きすがってきた奴らが今度は、眠っているだけのミロクとやらを拝み始めた。狂ってる、間違ってるんだ奴らは。・・・だからあいつを殺してやる。あいつを殺してもう一度この世界をリセットしてやる。ゲーム再開だ。

アルバート ジーザス・・・。

ジーザス アルバートアインシュタイン。おまえもその一人だ。俺を無視し、世界を扇動した。お前はおれにとつて、最大の敵だった。・・・とにかく、ここで死んでもらうぜ。ゲームオーバーだ。

(大きなアラビア風のナイフをだす)

アルバート そうか、そういうことが。

ダイバダッタが現れる。

ダイバダッタ 止める、ジーザス！ この男を殺すのはおれの役目だ。

アルバート ダイバダッタか。なるほど、わかってきたぞこのカラクリが。

シダッタ ジーザス、止める。この人を殺してどうするんだ。何が変わるんだ。

ジーザス アルバート、おまえが憎い。俺を必要としなくなった人々が憎い。すべておまえらのような科学者の輩のせいだ。・・・憎しみだ。憎しみが押さえられない。俺は今まで右の頬となぐられたら、左の頬

を差し出せと説いてきた。しかし、そんなの嘘っぱちだ。
ダイバダッタ ジーザス！ もういいだろう。お前の苦しみは分かった。しかし、今更、どうしようもないだろう。止めるんだ。
(アルバートの前に立つ)
ジーザス だけ、坊主。だけ！ どくんだ！
ダイバダッタ ・ ・ ・ 彼を殺るなら私を殺してからいけ。
ジーザス そうかい、それならそうさせてもらうよ。

ジーザス、あっけなくナイフを振り上げ、ダイバダッタの腹を突き刺す。
シダッタが飛びつき、ジーザスの手を取るが、間に合わなかった。

シダッタ 止める！

ダイバダッタ、倒れる。

ダイバダッタ ジーザス。ジーザス。

ジーザス ・ ・ ・。

ダイバダッタ イエスよ、私は、あなたを・

ジーザス ・ ・ ・ ユダ。何を言っているんだ。ダイバダッタ ナザレのイエスよ。私は裏切り者だ。何度生まれ変わっても裏切り者の輪廻から抜け出ることができなかった！
地獄だ。これが本当の地獄だ。でもこれで死本当に死ねる・ ・ ・。

ダイバダッタ、死ぬ。

暗転。

24場

屋上。

佐竹と高井。

二人とも片手にパンとジュースを持って軽く食事をしている。

高井 大学とか行こうと思ったんですけどね。やっぱ私には必要ないと思って。

佐竹 (たばこに火をつけながら) ふうん。
今まで予備校行ってたのか。 ・ ・ ・ 今日風が気持ちいいや。やっぱ屋上はいいね。

高井 (口にピアスを付ける) そうなんすよ。こう見えても勉強してたんです。

佐竹 なに? ピアス、耳だけじゃないの? 口にも穴開いてたの?

高井 初日に、口ピアスしてきたんですけどね。布川さんがはずせつていうもんだから。佐竹 お客さんにお茶出さないといけないからね。

高井 でも面接の時は口ピアスしてたんですよ。それで採用だからいいと思うじゃないですか。それなのにはずせつて。

佐竹 見せて。・・・痛そー。ジュースとか飲んだら漏れてこない。

高井 漏れますよ。牛乳とかびゅーと出ておもしろいですよ。見ますか?

佐竹 (笑う) いいよ。もしかしてへそピアスもしてるの?

高井 え? してますよ。見ますか。

佐竹 え・・・でも今休み時間だから。

高井 ほら(シャツをめくる)

佐竹 すごいね。感動だ。

高井 はい、おしまい。・・・そうそう、啓介さんいますよね。

佐竹 ああ、啓ちゃんね。

高井 啓介さんつて、しゃべるとき、どもつたりして。なんか変。

佐竹 あの人工エンジニアだからね。そういう人多いよ。

高井 病気なんですか。

佐竹 昔自閉症だったみたいよ。いじめもたくさんされたらしいし。

高井 だからかあ。まともに人の目をみて話さないんですよね。

佐竹 そうだねえ。

高井 でも佐竹さんだけとは話すんですね。

佐竹 僕とは年が近いからね。高井さんにももうすぐちゃんと話してくると思うよ。慣れない人だと緊張してどもっちゃったりするみたいだから。

高井 (たばこを取り出し吸う)

佐竹 たばこ、吸うの?

高井 みんなの前では吸わなかったんですけど。一応、未成年ですから。でもここ、変な薬?とか勤務中にやつてるくらいだから・・・今までいるんなバイトしたけど、こななやばそうな会社のバイト初めてですよ。・・・やめちゃおうかな。

佐竹 (笑う) どうしても嫌だったら仕方ないね。・・・店とかがいいんじゃないの? 似合ってるよ。

高井 店員ですか。時給安いんですよ。それに厳しいのいやなんですよ。人間関係とかここ、みんな年上でしょ。子供扱いされるときはむかつくけど、楽なんです。

佐竹 やりたいたいことつてあるの。

高井 やりたいたいこと？ やりたいたいことですか？

佐竹 うん。やりたいたいこと。

高井・・・予備校、やめちゃったしな。やつぱ、頭悪いんですよ。それで、どうしようかなあつて。フロムエーめくつてたら制作補助つて書いてあつたから、おもしろそうだし・・・やりたいたいことか。そういえば思いつかないなあ・・・佐竹さんつていくつ？ 30過ぎとは聞いているんだけど。

佐竹 僕？ 秘密。芸術家は年をとらないの。高井 いいじゃん、歳くらい教えてくれたつて。女じゃないんだから・・・じゃあ、どうして社員で働かないの？ そっちのが儲かるでしょ。

佐竹 いや。おとこのロマンとかね。3

高井 3歳にもなつてバイトはつらいけど・・・よりずっと年上だ。15も離れてる。

佐竹 そうだね。

高井・・・15も年上かあ。そんな年上とやつたことないなあ。

佐竹 (ぶ、ジューズを吹き出し、咳き込む)

高井 大丈夫すか。

佐竹 いや、急に過激なこというもんだから。

高井 佐竹さんは、彼女いないの。

佐竹 いないねえ。

高井 そういう人ほどいたりするんだよね。

佐竹 いや、本当。影も形もなし。

高井 そっか！。もし、突然、遊びに行つて彼女がいたらやばいなあ、つて思つてただ。よかつた。

佐竹 なに？

高井 いえ、なんでもないつす。そうそう今日社長から、飯でも食わないかつて誘われてるんです。どう思います？

佐竹 あ、そう。

高井 係長つて社長の奥さんでしょ。誘つてるときに、あたしの横でにこにこしてるんです。変ですよ。

佐竹 ははあ、それはもしかして。そっか。社長も早いね。

高井 なんですか。それ。いつも、バイトの女の子に手を出してるんですか？ 奥さん

いるのに？

佐竹 いやいや。そうじゃないんだなあ。これって言ってもいいのかなあ。

高井 なんですか。教えてくださいよ。

佐竹 まあ、高井さんがすっかりしてればなんにも問題ないんだけどね。食事のあと、いろいろあるのよ。

高井 なんなんですか。もつたいぶらないでおしえてくださいよ。

佐竹 まあ、宗教なんだよね。

高井 宗教？！

佐竹 そう、宗教。社長が熱心に信者を集めてるんだよね。たぶん、食事をごちそうになつるとそれに誘われるよ。

高井 えー。チヨウキもい！ 変な薬売つてるし、おまけに宗教やつてるなんて、まさかオウムじゃないでしょうね。

佐竹 オウムじゃないよ。でも、なんだか、しつこいよ。初詣に神社にいくとか、おまもりを買うとか、よけいなお世話だね。

高井 うわあ。・・・佐竹さん、もしかして、信者だったりするの。

佐竹 僕？ 違うよ。神のことはわからない。そうそう、エンジンアの啓ちゃんはお寺にもつれていかれたらしいよ。俺は神なんて信じちゃいない！ つて拒んだらしい。僕は、前もつて知つてたから最初から誘いは乗らなかつたね。でも、そのかわりつて言つちやなんだけど突然、家に仏壇が郵送されてきたよ。まいつたね。すてるにも捨てられないでしょ。

高井 仏壇が？ キモーイ。

佐竹 そう、宅急便でね。

高井 迷惑でしょ。思い切つて捨てるなり、

社長に突き返すなりしたらどうですか。

佐竹 僕もこの年で作家志望でしょ。アルバイトもないし、いろいろと生活に困つてね。部屋に仏壇置くだけで、仕事もらえるならそれでいいや、つて割り切つたんだよ。

高井 ふうん。

佐竹 1年前、僕と一緒にアルバイトに入つた女の子がいたんだけど、やっぱり社長が宗教に勧誘したみたいだね。その後寺につれていかれたつて言つてた。

高井 そのアルバイトの女の人。その後どうなつたんですか。

佐竹 それがいやで、すぐ辞めちゃった。

高井 もしかして、課長も、係長も布川さんも信者なんですか。

佐竹 うん。社員ほとんどそうだよ。東京支部とかいってたなあ。

高井 東京支部?! なんすかそれ。

佐竹 支部に分かれて活動してるんじゃないかなあ。信者の勧誘とか。

高井 ショック。・・・あたし午後からはつくれちゃおうかな。

佐竹 高井さんが突然いなくなったら大変だよ。

高井 とにかく宗教がいや。そして、やばい薬を扱うのもいや。それに社長も布川さんも私を必要としないもん。制作っていつもお茶くみばかり。私ブスだし。胸ないし。

佐竹 ブスと胸は関係ないでしょ。それに高井さんは違うよ。浜崎あゆみに似ててかわいよ。

高井 げ。佐竹さん、目、やばいよ。全然似てない。あたしのことかわいいなんで。

佐竹 似てるって。かわいって。

高井 本当。あたし、かわいい?

佐竹 かわいい。

高井 わー。今日、佐竹さんちに遊びにいつちやおう。

佐竹 えー! なんでそうなるの。

高井 だって、かわいいんでしょ。

佐竹 いや、でも。アルバイト同士でなにかあるとー。

高井 いいのいいの。お母さんには友達のとこに泊まりにいくって言うから。

佐竹 泊まり?! それは・・・。

高井 あれ、あそこにいるの小林さんじゃないですか。

佐竹 え?

高井 ほら、小林さんですよ。

佐竹 ほんとだ。何やってんだろ。

高井 また社長に怒られて、まいつてんのかなあ。

佐竹 社長も社長だよな。悪いことは全部小林さんのせいだからなあ。みててかわいそうだよ。これもいじめだね。

高井 小林さんって、家族いるんですか?

佐竹 独身だつて聞いたよ。

高井 きついですね。独身であの顔で、デブ、ハゲですか。

佐竹 うわあ。厳しいね。でも、最近彼女ができたつて聞いたよ。

高井 まさか。はったりじゃないすか。

佐竹 いや、本当。なんでも同じ・・・あれ? 小林さん、柵を登ってるよ。(立ち

上がる)
高井 げ！ 何するんですかね。（立ち上がる）

佐竹 屋上で柵のぼるって、決まってるよ！
高井 やば、やっぱやばいすよ。佐竹さん。

止めないと。

佐竹 待て待て、騒ぐな。今刺激したらまずいよ。飛び降りちゃうよ。

高井 どうするんですか。

佐竹 えええ！

高井 佐竹さん、何パニックってるんすか。

佐竹 あわわ。

高井 しっかりしてくださいよ。ほら、深呼吸。

佐竹 ふー。ふー。こんな場面に遭遇するのは、一生ないと思ってた。

高井 ああ、柵乗り越えちゃって、ふらふら、してますよ。もう落ちそうですよ。やばいすよ。・・・小林さん！ 小林さん！

佐竹 小林さん！ 小林さん！

高井 あ、こっち向いたよ。

佐竹 小林さん、早まつちや駄目だ！ ちょっと待って！

高井 小林さん！ 小林さん！ 彼女いるんでしょ。彼女が泣いちゃうよ。

佐竹、高井、半狂乱になる。

佐竹・高井 小林さん！ 小林さん！

暗転。

25場

輸入代行会社。

小林、震えながらソファーに座っている。社長は事務所にあるテレビのモニターを見ている。

営業マンたちは小さな声で電話を続けている。

佐竹 社長、人が悪いですよ。危ないじゃないですか。

高井 ……。

社長 鳥ですよ。屋上のアンテナにガラスがいたんですよ。ほら、こんなによく映るようになった。さっきはまったく見えなかつたんですよ。

佐竹 なにも小林さんにやらせることないじ

やないですか。業者の人に頼むとか。

社長 うるさいな。業者じゃ間に合わなかつたんですよ。これからニュースが始まるんですよ。厚生労働省の特集なんですよ。どうしても見ないといけないんですよ。

佐竹 でも、小林さん、あそこで滑ったら、死んじゃってますよ。

課長 佐竹ちゃん、テレビアンテナってそんなに危ないところにあつたの？

佐竹 課長。だって屋上の柵の外ですよ。このビル何階だと思ってるんですか。

課長 うわー。社長って残酷。

社長 大げさんですよ。私だって、屋上に昇ったことくらいあるんですよ。気持ちいいじゃないですか。気分転換させてあげたんですよ。

係長 (小林にコーヒーを) 小林さん、ハイ。

小林 (震えながら) ありがとうございます。

係長 かわいそうに。高所恐怖症なら先に言ってくればよかつたのに。

課長 社長から言われたらねえ。言えないわよねえ。

社長 ……小林。初めて会社の役に立つたぞ。ほめてやる。

小林 ……。

社長、テレビを見続ける。

営業マンたちは、ひたすら営業を続ける。

佐竹、啓介の横に座る。

佐竹 いやあ、ほんとに驚いたよ。小林さん、飛び降りるんじゃないかと勘違いしたよ。

啓介 社長も…むちゃくちゃだなあ。

佐竹 漫画家のねこぢるが首つり自殺したつて、聞いたばかりだつたじゃない。だから、てつきりねえ。

啓介 (笑う)

佐竹 みんな見てないから分かんないんだよね。本当に焦つたよ、あれは。ねえ、高井さん。

高井 チョウ焦りましたよ。腰抜けそうでした。あたしと、佐竹さん、よくよく考えたら笑っちゃいますね。

佐竹 ああ、あのパニクリ方は、ちょっとかつこ悪かつたなあ。

社長 高井君！ 高井君！

高井 あ、はい。

社長 このテレビしまつといて。

高井 もう見ないんですか。
社長 うん、たいした内容じゃない。見るの
やめた。

高井 でも。せっかく小林さんが。
社長 いいんですよ。しまつて。

高井 ・ ・ ・ はい。
社長 布川君、そろそろ営業ミーティング、
しますよ。

布川 はい。
社長 花岡君。その電話終わったら、全員、
会議室に。

花岡 (電話しながら頷く)

社長 小林！ いつまで震えてるんだ。もう
終わつたんですよ。会議室にきなさい。
小林 ・ ・ ・ 。

社長、布川去る。

暗転。

26場

風と光の中。

シダッタ アルバート！ どこにいる。アル
バート、畜生、はぐれた。道が見えない。
道はどこだ。きつとどこかに道があるはず
だ。

庸子が現れる。

シダッタ 庸子、なのか。どうした。どうし
てここにいる。

庸子 お兄さんこそ、どうしたの。あの、穴
に落ちてからずっと探していたのよ。

シダッタ 穴。
庸子 そうよ。あの窪みにできた大きな穴。

シダッタ ・ ・ ・ そうか、地下に亀裂ができ
て、大きな穴ができた。僕はあの大きな穴
にはいった。そして、地下に潜り込んだ。

庸子 人はいたの。
シダッタ いる、たくさん。みんな、修行を
していた。

庸子 修行。
シダッタ そうさ、シエルターと呼ばれる、
アルバートの中で、一生懸命、呪文みたいの
を唱えてた。

庸子 人はいるのね。私たちだけじゃないの

ね。
シダッタ いる。想像もできないくらいたく
さんだ。あのシエルターの数は・・・一億、
いや。何十億という数えられないくらいだ
・・・母さんは。

庸子・・・。
シダッタ 父さんはどうした。

庸子 死んだわ。兄さんを捜しているうちに
・・・食料もなくなってるね。

シダッタ 死んだ・・・父さんも、母さんも
庸子 そう。死んだわ。

シダッタ 僕は長い夢を見ていたのか。僕は
昔、山の上にいた。何千という弟子を従え
て。そして人々を救う立場にいた。まるで

庸子 兄さん、神様はね。もうとっくの昔に
死んだのよ。

シダッタ・・・。

庸子（笑う）。みんな死んだ。みんない
なくなつた。そうよ。私たち以外、誰もい
ないの。

シダッタ そんな！ そんな馬鹿な事って・
・・・ジーザス。君だね。

庸子（笑う）

シダッタ アルバート！ アルバート！ 助
けてくれアルバート。

庸子の姿が消え、ジーザスになる。

アルバートは、腕をジーザスに綱でくく
られている。

ジーザス さすがはお前さんだ。俺の神通力
が全く通じない。

シダッタ アルバートを離せ。

ジーザス いやだね。ミロクに会いに行った
奴は、みな、強い光にやられちまうと聞い
たからな。あの有名なムハンマドはその光
で消滅したらしい。だからこいつは盾に使
う。こいつは光を自由に扱えるんだろつ。
え、そうじゃないのかアインシュタインさ
んよ。

アルバート 自然は私たちの力では自由には
ならん。痛いほどわかってるだろ。

アルバート シダッタ、私のことは構うな。

早く、こいつを始末しろ。

シダッタ 始末？

アルバート そうだ、始末するんだ。

シダッタ わからない。

アルバート 何がわからないんだ。お前、こ
いつを殺りに来たんだろ。それで追いか

てきたんだろ。

シダツタ 殺りに・・・わからない。ジーザスを殺すのか。

アルバート そうだ。殺すんだ。奴は何度も生まれ変わってお前を殺そうとするぞ。そしていつかお前は激しい憎しみを持つようになるだろう。そしてその戦いは永遠に終わらない。しかし、ここで消滅させればすべては終わりだ。

シダツタ わからない。

アルバート ああ、じれったい。シダツタ。

早く、こいつを封じろ。

シダツタ アルバート待ってくれ。考えさせてくれ。

ジーザス 時間がない。お前が俺を殺らないなら、先に行くぜ、ミロクのもとへ。・

・さあ、おっさん、歩け。

アルバート シダツタ！

ジーザスと、アルバート歩き始める。

シダツタ ジーザス、待ってくれ。

ジーザス (立ち止まる)

シダツタ 僕は神などどうでもいい。ミロクが何をしようが関係ないんだ。ただ、本当のことが知りたいんだ。僕の父さんや、母さん、そして妹がどうなったのか。僕は どうして、ここにいるのか。

ジーザス だから？

シダツタ だから・・・一緒に行ってくれないか。僕独りの力ではミロクへの道は見つけられない。ムハンマドのように焼き尽くされるだろう。

ジーザス ムハンマドは人間だったからな。

あいつには最初から無理だった。

シダツタ 君もだよ。ジーザス。

ジーザス 何だと。

シダツタ いずれ君は焼き尽くされる。僕にはその姿が見える。

ジーザス ・・・・

間。

アルバート 私も本当のことが知りたい。私 がなぜここにいるのかだ。この際、お互いに協力しあってもいいじゃないか。

ジーザス ふん。

シダツタ 頼む。一緒に行ってくれ。

輸入代行会社。

緊迫した空気が流れる。

小林、柴がない。

小林の席に、ミニスカートの女性。川崎が座っている。

社長 くそ！ 小林の奴。自宅に連絡ついた？

課長 (電話を片手に) おかけになった電話番号は使われてませんって。

係長 この履歴書、でたらめですね。住所も等々力9丁目って、・・・そんな住所ないですね。

社長 携帯は？ 奴はいつも使ってただろ。

花岡 かけてます。ずっと留守番電話です。

社長 布川君、先週最後までいたの君と小林だけ。

布川 ええ、私と小林君だけでした。私は、6時から8時まで道安先生と打ち合わせで外出してました。彼が一人だったのはその2時間ですね。

社長 花岡、おまえが残業しないからだよ。小林をひとりにしやがって。まったく、美人と結婚するから早く帰りたがるんですよ。花岡 すみません。

電話がなり岸川がとる。

社長 柴は、どうした。遅刻か。

花岡 柴君も連絡ありません。

社長 まさか、小林と組んだってことないだらな。

花岡 それはないと思いますけど。

社長 あああ、全く、井田の次は小林か。井田は、コピーして持っていったんだよ。俺たちが気がつかないように。小林はどうかしてるよ。当てつけだな。どうどうと原本ごと全部もっていきやがった。

岸川 柴部長について、電話がはいってるんですけど。どうします。

社長 柴部長？ ああ、あいつ部長にしたんだっけ。こんなときに遅刻しやがって・・・とりあえず、いないって言って。外出中だっけ。

岸川 はい。

社長 課長、金庫の方はどうなの。触られてない？

課長 ええ、現金もすべて大丈夫です。鍵は私しかもってないですから。

社長 じゃあ、顧客名簿だけか。まったく。

啓介！

啓介 あ、はい。

社長 パソコンのなかの顧客名簿、大丈夫か。
啓介 ええ、セキュリティかけてますから大丈夫です。画面で閲覧するだけでいじれません。

社長 全部、プリントアウトして。

啓介 全部ですか。一日かかりますけど。

社長 だって仕事にならないでしょ。原本が全部盗まれたんだから。すぐやって。佐竹と高井も手伝って。

佐竹・高井 はい。

片岡 警察に連絡しますか。

社長 布川君、どうする。

布川 警察は、ちよつと待ったほうがいいですね。薬事科からも睨まれてますからね。

社長 例の名簿もやられたか。

布川 はい。すつかり。

社長 よし、課長、係長、それに布川君。ミーティングだ。片岡、岸川、営業続けてて。

社長、布川、課長、係長は会議室へ。

全部の電話がなり、みんな対応に追われる。

啓介 え、ああ。．．．あ、小林さんからメールが来てる。．．．あれ、僕ちゃんびつくり。

佐竹 どうれ、あれ、ほんとだ。

高井 なんすか。．．．わわわ。退職届ですか。

佐竹 うーん。ファックスでって聞いたことあるけどメールの退職届は初めてみた。

啓介 ．．．どうする、これ。

佐竹 一応、プリントアウトして社長に見せた方がいいんじゃない。

啓介 そだね。でもやだな。こんなときに。

高井 小林さんの席にいる、あの方は誰ですか。

啓介 さあ、朝から座ってる。僕、忙しかつたから．．．。新しい営業の社員みたいですよ。

高井 えー。ほんとですか。

佐竹 社長今度は、女性を口説いたのか。

高井 今週、求人とか出してないでしょ。どうやって。

佐竹 あれ、知らなかった？ 社長はお寺で求人してんのよ。

高井 お寺？ 例の宗教ですか。

佐竹 そうたぶん、その信者だね。

高井 ショック。じゃあ、あそこに座ってる女の人も。

佐竹 たぶん、そうじゃない。日曜日に、お寺でスカウトしてきたんじゃない。

高井 ……

啓介 小林さんのメール、プリントアウトできたけど…どうしよ。

佐竹 私事、都合により退職させていただきます。なんか横文字だから変だね。誰が社長に渡す？

啓介 僕は、やだなあ。

佐竹 高井さんが渡せば？ 社長女の子に弱いし。

高井 冗談じゃないですよ。佐竹さん年上なんだからやってくださいよ。

佐竹 ええ？ しかたないなあ。

社長たち、会議室から出てくる。

社長 花岡君、もういちど確認しますけど。

なくなつたのは顧客名簿の原本だけ？ 金曜日の定時にはあつたんですね。

花岡 はい。そうです。私が帰るときには、この戸棚に全部ありました。

社長 よし、わかった。

花岡 警察ですか。

社長 いや、警察は辞めた。しばらく様子を見る。名簿会社に売ったり、ほかに流したりしたのがわかった時点で手を打つ。たぶん、俺への嫌がらせだ。なんにもないだろ。

花岡 そうですか。

社長 気にするな。どんどん営業やって。高井君！ お茶ちょうだい。

高井 はい。

佐竹 あの、社長、これなんですけど。(メールの紙を渡す)メールが届きました。小林さんからです。

社長 何これ。

布川 タイトル、退職届。

社長 メールで退職届？ なんと…っはは。まあ、仕方ないか。そうだ、みんな！ 川崎！ ちよつとこつちきて！

川崎、セクシーに腰をくねらせながらくる。

社長 ええ、みんな、見てる？ ちよつと紹介が遅れましたが、川崎・・なんだっけ。
川崎 川崎秋子ともうします。
社長 川崎秋子君。今日からうちで働いてもらうことになったから。
花岡 よろしく。席はどうします。
社長 小林の席を片づけて。
花岡 はあ。
社長 どうですか、川崎君。いい女でしょ。みんなやる気になるでしょ。ね、係長、その方が会社がぱつと明るくなるでしょ。
係長 さあ。(冷たく)
社長 課長、男性の客はやっぱり女性の方が喜ぶよな。
課長 それはどうですか。
社長 佐竹、いいよな。独身だぞ。ほら、ぴちぴちだ。
佐竹 はい、きれいですね。
社長 やる気出たか。
佐竹 はい。
社長 そうなんですよ。そうなんですよ。高井君。見習いなさいよ。ほら、こういうエレガントな女性になりなさい。
高井 あ、はい。
社長 さあ、嫌なことは忘れて、がんばりましょ。さあ、仕事始めて。

28場

空間に仏像がたくさん浮かぶ。
アルバートと、シダッタ、ジーザス。
一人の僧侶が座っている。

ブラフマン ジーザス、ここには来ない約束だったぞ。
ジーザス 約束？
ブラフマン ・・・。
シダッタ おまえは、確か・・・。
ブラフマン シダッタ。いや、ブツダよ。いつか、会ったきりだったな。お前が入滅した頃に。
シダッタ 皆が救いを求めている。どうしてだ。どうして、世界は滅んでしまったんだ。それが知りたい。
ブラフマン 失敗したからだ。もう、我々はお前たちに期待していない。
シダッタ 我々？ 我々とはなんだ。
ブラフマン ・・・。
シダッタ 誰が、世界を滅ぼした？

ブラフマン ……。
シダッタ ミロクか。ミロクは、どこにいる。
会わせてくれ。

ブラフマン ……。
ジーザス この仏像のどれかだな。畜生。ど
いつもこいつも同じような顔しやがって。
どいつだ、どれがミロクなんだ。ミロク！
え！

ブラフマン ジーザスよ。そう興奮するな。
ジーザス 何をいまさらー。

アルバート よく見る、この仏像、全部張り
ぼての人形だ。すべて虚像だ。

ジーザス なんだって。

シダッタ 本当だ。これは、みんな偽物だ。
これはどこからか映し出されているんだ。
実体はどこに？

ブラフマン そうだ、ここには実体はない。
一つ教えてやるう。お前らみな期待して
いるそのミロクとやらは、ここにはいない。
最初からだ。

シダッタ 何！

ジーザス こいつだ。この声、聞き覚えがあ
るぞ。俺に、世界を救えと命令したのはこ
いつだ。そうだ、そして、父のために死ね
とிட்டた。本当はこいつがミロクなんだ。
くそ！ 死ね！

ナイフを振りかざしてブラフマンを切る。
ナイフは空を切り、ブラフマンは微動だ
にしない。

ブラフマン 私は、ある時は羽をはやし、あ
る時は巨塔となり、そして人の形にもなっ
た。そして、我々の命令をお前たちに伝え
た。しかし、ミロクはもういない。今、お
前たちが見ている私の姿も、ずいぶん昔の
映像だ。

シダッタ ……。

アルバート、大声で笑う。

アルバート ミロクなど最初からいなかった
んだ。56億年7千万年もの間。我々をだ
まし続けた。

ジーザス、シダッタ愕然とし、膝を折る。
ブラフマン、合掌する。

シダッタ 嘘だ、嘘だ！ こんな事、みんな
嘘だ！

暗転。

29場

ジーザスの世界。

マザー もう、迷子になるなんて子供じゃないんだから。せっかくの外出日だったのに。マリア そうよ。兄さんを探してたおかげで買物できなかったわよ。

ファーザー ははは、いいじゃないか。男の子だ、たまにはそういうこともある。

ファーザーは、パソコンの画面を見る。

ファーザー お、明日は外出日だ。いいぞ。

こんどは何を買うかな。・・・ジーザス！
ジーザス！ エラーが出てるぞ。

ジーザス あ、本当だ。

ファーザー まだまだだな。もう一度リセットしたらどうだ。

ジーザス いや、まだ、できるよ。このまま続ける。

ファーザー よし、偉いぞ。よく勉強するんだ。リセットするのは簡単だからな。

30場

シダッタの世界。

父2 シダッタ。シダッタ。

母 シダッタ。

庸子 兄さん。

シダッタ、父に抱きかかえられながら起きる。

シダッタ あ、父さん。

母 ずいぶん、ひどい傷ね。すぐに手当してないと。

シダッタ 父さん、穴の中にはね、僕ね、ずいぶん、歩いたよ。そしたらね。

父2 いい、もう黙ってる。庸子、水だ。水を飲ませてやれ。

庸子、ペットボトルの水をシダッタの口

に注ぐ。

シダッタ（咳き込みながら）ありがとう。
父2、2、3日待とう。お前の元気になった
ら、もう一度探しに行こう。いる、人はき
つといる。希望をすてるな。
シダッタ・・・。

暗転。

31場

輸入代行会社。

社員、アルバイト、全員。

柴はいない。

そして道安がいる。

社長 さて、いろいろあつたけど、今年も会
社は乗り切ることができた。銀行から融資
を受けられるようになった。来年はもっと
もっと大きくなる。それと言うのもです
すべてはここにいる道安先生がですね。代
議士の小川道夫先生に話を通してくれたお
かげです。道安先生、ありがとうございます。
す。

道安（合掌して）いえ、いえ。

社長 係長、準備して。

小林が入ってくる。

社長 おう、待っていたよ。ちょうど今、始
めるところだ。間に合ってよかった。

小林 遅くなりました。

高井 小林さん？

佐竹 え・・・小林さん・・・。

小林？

佐竹 小林さんですよ。

社長 小林？ 誰のことだ？

佐竹 え？ メールで退職した、あの小林さ
んじゃあ。

社長 メール。小林？ 何かと間違っ
てないか。いい男。

佐竹 でも。

社長 まあ、いいや、黙ってなさい。

佐竹 はあ。

社長 諸君、柴君が退社して、代わりに営業
を担当してくれることになった、江崎君だ。

小林 江崎ともうします。支部長、いや、社長にはいつも日頃からお世話になっております。よろしくおねがします。

皆、それぞれ、お願いします。という。

社長 さあ、今年最後の勤行をしますよ。アルバイト諸君もとりあえず、形だけでもいいですから、手を合わせて、ね。後は、花岡君。

花岡 では、みなさん、来年もよりいっそう、会社が、サムシングが飛躍しますように。祈りましょう。

係長、課長、奥の扉を開ける。

そこは仏壇になっていて弥勒菩薩の像がある。

社員、皆、数珠をだす。

佐竹、啓介、高井はしかたなく手を合わせる。

花岡 (大声で) なーむーみろくぼさつ。

全員 南無、弥勒菩薩。南無、弥勒菩薩。(繰り返す)

妙法蓮華経・如来寿量品第十六、自我偈を唱える。

皆、声を上げて祈る。

自我得仏来 所経諸劫数
無量百千万 億載阿僧祇
常説法教化 無数億衆生
令入於仏道 爾来無量劫
為度衆生故 方便現涅槃
而実不滅度 常住此説法
我常住於此 以諸神通力
令顛倒衆生 雖近而不見
・
・
・
・
・
・

佐竹が次第にブツタの顔になる。

ブツダ (佐竹) (東に) 私の言うことを聞け！ 私を信頼せよ！ 私の真実の言葉に頼れ！

ブツダ (西に) 私の言うことを聞け！ 私を信頼せよ！ 私の真実の言葉に頼れ！

ブツダ（南に）私の言うことを聞け！ 私を信頼せよ！ 私の真実の言葉に頼れ！

ブツダ マイトレーヤ。ミロクよ。おまえは3度も私に尋ねた。では、答えよう。私は神祕の力がある。そうだ、神通力だ。私は釈迦族の王家から出家し、修行を積み、ある時、完全なる悟りに達した。そのように人間は思っている。神もそう思っている。しかし実はそうではないのだ。．．．静まれ、静まらんか！

私が悟り開いてから、すでに幾千万億劫という時間が経過している。それは永遠に等しいほどの無量無辺の時間だ。その間に、私は無数の弟子たちを教化してきたのだ。．．．その弟子たちは．．．弟子たちは今．．．（周りを見渡す。誰もいない）うるさい！ 私の言葉を聞け！ 私を信頼せよ！ 私の真実の言葉に頼れ！

ブツダ マイトレーヤ。ミロクよ。ミロクよ。聞いていますのか。おまえは3度も私に尋ねた。だから私は．．．私の弟子たちよ。どこにいる。どこにいるんだ！

完